

子婦



第七卷

第三號

香

婦人と子ども第七卷第三號目次

卷首

音楽.....(泰西名畫).....

婦人と子ども

子供のいたづら.....湘南生...一

婦人の幸福.....海老名彈正...二

理想の母親.....中村五六...八

家庭に於ける諸儀式.....後閑菊野...一〇

音楽と家庭.....天谷秀...二六

入浴上の衛生.....新見義雄...二七

子供の早熟.....和田實...一九

笑顔の力.....孤蓬生...三

婦人と親族法.....太田英隆...七

臺所の改良.....道子...九

在米日本婦人.....在米西山哲治...一〇

短歌.....三三

此頃の料理.....石井泰次郎...一四

眞似方料理.....もと子...一五

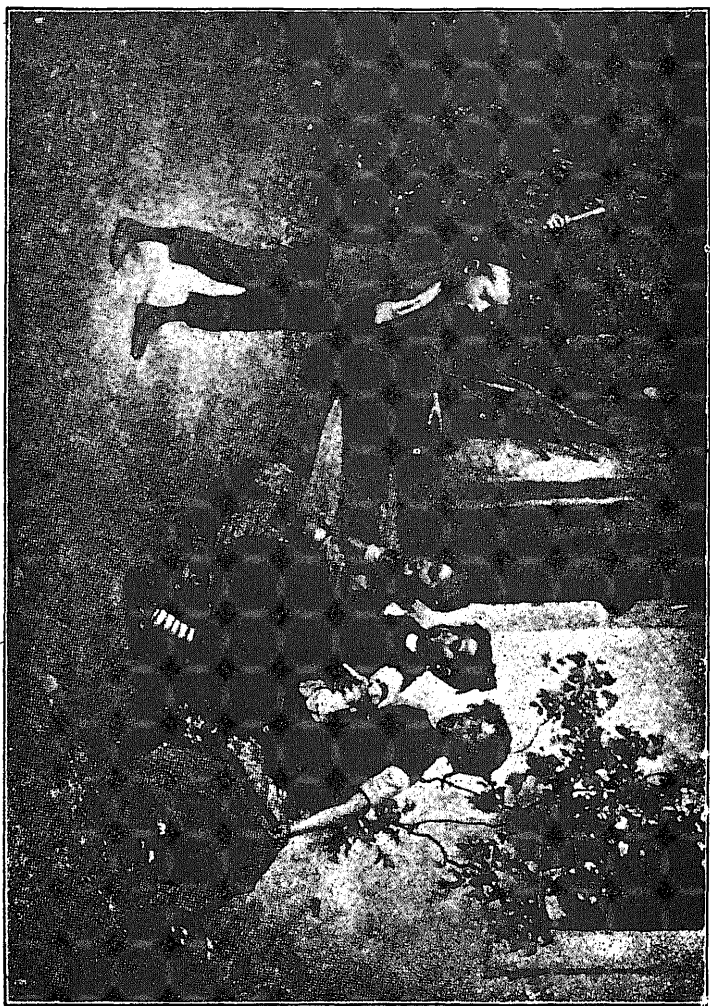
お加笑話 猫なし村.....硯山人...一六

愛らしのカール.....つる子...一六

亞米利加よりの私信.....在米幻...一四

旅の道草.....なにがし...一四

編輯記事.....記者...一四



(畫名西泰)

樂

音

會長伯爵夫人鳥丸操子

高等女學講義

毎月二期發行ケ一年半卒業月謝十四日東修十三日

皆さん!!! これからの婦人は學問がなくてはなりません

▼本會は近頃の講義録が餘り亂暴な行爲を致し出すから其弊を防ぐ爲に成立つたものです

▼本會は全國の教育家の贊助により眞面目なる教育家の企圖になつたもので

▼本會の講義は皆ごんが自宅で獨習の出来るよう工夫をこらして丁寧に講義してまいります

▲本會卒業生は貸費生其他の特待がまいります

●本會に入錢なから家に居乍ら、女學校に居ると同様の學力がつきます

家庭雜誌 大王 大家庭

第二卷第三號五月二十日  
第二卷第三號六月二十日

發行

定價一册金七錢 郵稅金五厘 六册前金四拾錢 十二册前金八拾錢  
材料豊富にして記事清新家庭の讀物の上乗なるは多言を要せず

見一本冊二十五錢規則進呈

振替貯金口座壹壹壹壹番

修身	東京高等女學校教師	市川源三
國語	東京高等師範教授	吉川彌平
習字	東京高等女學校教授	岩田鶴皐
算術	東京高等師範教授	生駒萬吉
歴史	東京府高等女學校教授	稲垣米造
圖畫	東京府高等女學校教師	峰岸豊
英語	女子高等師範講師	依田白敏
地理	正則英語學校教師	森田夏苗
理科	早稻田中學校教師	小田通敏
家事	女子高等師範教諭	竹島三郎
裁縫	女子高等師範教授	森川茂郎
茶湯	東京高等女學校教授	牧本勉
花藝	高等家政學校教授主任	宮川はつ子
女子實業	女子高等師範學校教授	吉村千鶴子
女禮式	日本女子大學講師 日本弘文學院教師 日本婦人正風會長	市橋なみ子 兒島文茂 金太仁作 中島義武

擔任講師

會學女等高本日大 區川石小市京東 前所役區坂藤安

**造**も最高尙優美なる家庭の慰みであります。そして習ひ易く覺えや費用も手敷も道花簪

**花**となり。裝飾とな友人知る贈物としては大に歡れば仕事に愛をつけ又植物の觀察

は近づく自然界に實に婦人の趣味としても家庭教育の資りとするものはありませぬ

**日本造花研究會著作（最新刊）全一册**

# 新式 造花獨けいこ

挿畫三百餘

定價金五拾錢

郵稅金六錢

振替貯金口座 六六五

**本**女中が校閱本書を公にする前に、文字を一字も知らない女中に、材料と三四の用具を與へ置き、

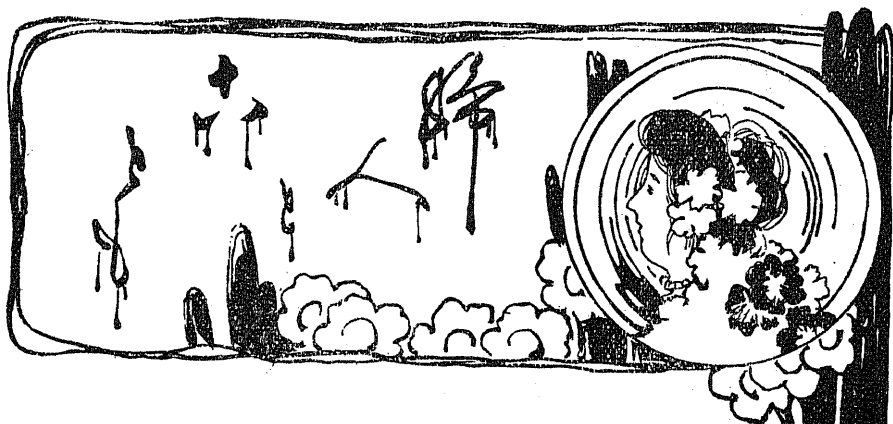
**書**讀まれたも、はつきり分ります。實際平易で親切で、真に獨けいこの名に背きませぬ

**の**材料は少し、材料は造くり易く、又求め易いものばかりを撰んでありますから、費用は殆どか

**特**道具は不用造花を始めてみたいが、道具費が澤山かゝるからとて、氣を落す方もありますが、

**色**標本を分與全く初めての方には、お望みならば、造くり上げた花と、各材料との實物標本を分

**發行所** 東京牛込區 納戸町六番 明治の家庭社 ●發賣所 東京日本橋區 本石町三丁目 寶文館 電話本局 二三一三



## 第七卷第三號

### 子供のいたづら

いたづらと一口に云ふと大層悪いことの様に見えるし、之を字に表はして悪戯と書く和尚更悪く見へるが決してそ一概にけなしたものではない。吾大に之を重視しなければならぬ。叔母さんから此の薄のろめと叱り飛ばされたワットが蒸氣機關の發明をするし、和蘭の一眼鏡師は小供いたづらに小言云ひながら望遠鏡を工夫したと云ふではないか。して見ると世界の大明は小供のいたづらから出ると云ふとも豈誣ひざらんやだ。實際小供の遊び程研究的態度に出でゝるものは大人にはたんとないです、フレイベルが小供の遊戯の結果を三つに分類して一を營生式(外界の模倣)一つを美麗式(美感のため)一つを學知式(研究的)と云つたのもつまり幼児遊戯の三動機を看破したので遊戯と研究的態度との密接なる關係を云ひ表はしたものであります。所で幼児をして遊戯の上に此研究的態度を取らせ様とするには彼等をして常に自由に快活に遊戯せしむることが必要條件で決して他より汗流刷耐などをしてはならないのであります。幼児遊戯の看護者は「眼はつけよ、手はつけるな」と云ふ諺を味はなければなりません。

(湘南)

## 婦人の幸福

海老名 彈正

婦人の生涯は通常三つに分けます、娘の生涯、妻の生涯、母の生涯の此三つであります、娘の時代の幸福は其生れた家庭に負ふ所が多いものであります、其父母がよく教育をして呉れたのと呉れないのとでは大變な違ひです、ですから早くから父や又は母を失つた女子は、比較的男子よりも多くの不幸を感じるでありません、けれども今は茲に女子の不幸を論ずるのではないから只両親を持つて居る女子の幸福に付て申しませう、

娘として幸福を得る心得はいろ／＼言ふ必要があるけれども先づ自分の両親に柔順なる事が大切である、父母たるものが特に悪いとか又常識を外れた様な行爲がある場合は特別であるけれども、之は例外であつて一般に父母は其子に對しては最も賢く又最も親切であつて、總べての點に於て、

子の模範となる事は自然の順序であるからして、其子たるものが父母に柔順なる事は幸福の生涯を送る道となるのです、稍々生長して考もだん／＼發達し、獨立の考も立つといふ時に、又は學校で勉學するのもだん／＼進んで、所謂年頃になると自分の事ばかりでなく、生涯の事をも考へなければならぬが、こゝに婚姻といふ大問題が起る、之は決して輕々しく決してはなりません、若し之を輕々しく決するやうな事をする、また結婚の式も濟まないうちに取り返しのない不幸に陥るでせう、如何に分別がつき、獨立の考があつても生涯の半身の問題を定める見識と能力とはまだ中々とても父母の智慧には及ばないものです、ですから順序からいつて此事は父母に任せる方が幸福です、それに父母とても父母の意見ばかりで決するといふ事はない必ず自分の承諾も求めるのであるから、自分は只自分の考をいつて父母の参考に供するがよろしい、若し誤つて自分の考で極め

てしまつた時に父母の意見と衝突する様な事でも  
 あると緩い脳髓と柔らかい心臓とを持つてゐる婦  
 女子は殆んど堪へられない板挟みに逢はなければ  
 ならない、幸に其の決したといふ相手が適當な人  
 であつても父母と衝突するといふ事は最も厭ふべ  
 き事でありませぬ、又其人がもし見誤つたなら父母  
 の心傷けた上に殆んど救ふ事の出来ない煩悶に  
 陥るでせう、そうなるに只徒らに世を果なんでも  
 鐵砲に何所へでも一身を放棄してしまふような自  
 暴自棄に終るようになる、この絶望は實に若い女  
 には恐るべき不幸であります、だから此大問題は  
 父母に任せて自分では只之に賛同する方が得策で  
 す、尤も今代では父母の資格と子供の教育とが非  
 常に懸けはなれてゐるといふ憂があるのです、往々  
 不幸にして此大問題を衝突を見る事があります、  
 父母は古風を貴び娘は新潮を酌むといふ具合でそ  
 こに困つた事になるのですが併し之は例外です  
 から茲には申しませぬ、常道としてはこんな大問

題は父母に任せて自分は只之に賛成して最後の決  
 心をした方が幸福であります、  
 妻としての女子の幸福は言ふまでもなく其配偶即  
 ち夫其人の如何に存するのであつて、如何に配偶  
 に注意すべきかといふ事は妻となつて初めて心付  
 く事である、そこで妻としての女子の幸福を考へ  
 るには、勢配偶者たる夫の撰び方に注意しなければ  
 なりません、娘の後見者たる寧ろ其保護者の父  
 母たる者が娘に一生の幸福を得させると否とは夫  
 の宜しきを得ると否とによるものである、故に父  
 母の責任も亦實に大なるものである、それならば  
 如何なるものを最も適當なものとするかといふに  
 先づ其人物の良否を問ふべき事は勿論でせう、種  
 々の條件に拘泥しないで、又種類とか同僚縁邊の  
 爲めに束縛せられずに只當人の人物如何に着目す  
 る事が第一です併し又第二に注意すべきは釣合と  
 いふ事です、如何に當人の人物がよくても彼此の  
 教育の程度が餘りに違つて居る様では幸福は得ら



れません、よく世間で馬は馬づれ牛は牛づれといひますが、大抵似よつた者を選ぶがよいです、其夫には非常に哲學的の學識や趣味があるのに妻にはそれが皆無であるとか又夫には非常に文學的の趣味があるのに妻にはそれがないと、いふ様な場合又夫は天下の大學者であるのに妻には教育がないとかいふ様な時には到底幸福は得られません、であるから又若し女子が平凡である場合には決して豪傑を撰んではならない、豪傑を好むといふ事は自然である、えらい人の妻になりたいといふ事は自然の人情ではありますけれども之はよく考へなければなりません、自分が平凡でもえらい人の妻になれば非常な名譽である様に一寸思はれるのであります、之は決して幸福な事ではありません、後で苦痛を感じる事は決して少ない例ではありません、又夫の家と自分の家との貧富の差異や貴賤の相違などは餘り意とするに足らない様ではあります、之とても大に考へべき事です、貧家の女子

が富者の妻となる事は一寸幸福の様に見えますが又一寸自分の面目の様に見えますが實際は決して幸福ではありません、人は決して孤立して居るものではありません、父母もあれば兄弟もあり、親戚もあります、之等との交はりから受ける幸福を捨て、富家に嫁す女子は實に人生の大部分を捨てたものであります、婚姻によりて在來の幸福を増す様にしなければならぬ、それには親族みなうちよつて之を全うしなければならぬでせう、貧なる自分の實父實母が富める夫の家の表玄關から出入する事が出来ないで又は中玄關より出入する事すらも出来ないで勝手口から出入するとかいふ様な風では其子たる妻が決して快い筈はないです、必ず心中には寂寥を感じ耻辱を覺えるに相違ありません、之は非常な苦痛であります、要するに女子は夫を撰ぶに當つては最も注意しなければならぬ、愛は勿論夫婦の根本でありますけれども、之に伴うて總べての事情が揃うて居なければ

幸福を全うする事は困難です、若し幸にして極めて適當な人を得て夫としたならば實に女子の幸福といふものはちやんと定つたものであります、故に只すぐれた夫を得んとのみ考へずに自分もすぐれた女徳を養ふ様にしなければなりません、ここに注意しない女は實に不幸です、故によさ夫を撰ぶ所のものは第一に自分の善良、柔順、淑徳ある女子たらん事を勉めなければなりません、母としての女子の幸福、之は妻としての幸福から生み出さるゝものであります、妻としての幸福に缺くる所の者はまゝ母としての幸福に於ても亦缺けるものです、何故といふに若し其の息子たり娘たるものがあまりに不釣合な時にはそこに一種の苦痛を實驗するに違ありません、何となれば其子女の意見と母の意見とが衝突するのであります、母が娘に一から十まで従ふといふことはできな、其子女が天稟あまりに親に勝つてをると其行動が母の行動と釣合がとれない所から、まゝ雌雞

が家鴨の卵をかへした様な不幸を見るものです、其卵がかへつて雛が生れたときに初めは愉快に育て、居ますが、だん／＼育つて其が水に浮ばうとする時に母がいかに心をなやませても、仕方ありません、元來其の雛が水に浮ぶのは其雛にとつては何の危険もないのであります、それを其雌雞が岸にゐて苦痛煩悶してゐる様は見人をして實に氣の毒に思はせるものであります、かういふ母は決して世に少なくはありません、であるから其子の意見行動と歩調の揃はぬといふ事は母にとつて決して幸福な事ではありません、次に母としての女子の幸福は其子の生長如何によります、之が其所を得ずして其子女の人格に大なる損害を作るやうな事があると母の不幸は之にこそすものはありません、故に母としての幸福は其子女の生長の最も完全ならん事に存じてゐるのです、ですから幼少から青年となり又獨立するに至るまで母たる者は其智育情育意育及躰育に付て十二分に力を盡す

大責任があるのです、第三に母としての女子の幸福は其子女が獨立的生活をするに到達した所をよく認めて、其人物相應に之に自由を與うる事であり、どんな子女でも一箇の見識が定まり分別がついてくると一から十までさう母の意見にばかり従つて居るものでありません、又それを望むべきではありません、子には又子相當の見識、考があるのですから母は之に教へると同時に又之から學ぶといふ心掛がなければなりません時代は船の走るが如くに常に走りつゝある者ですから年老いたものが只過去にのみ生活して居つては到底時代と一致する事はできません、子女が新時代に生きたる母は昔の時代に生きてゐるといふ風では母子の間に新舊の衝突は免れません、茲は母たるものが顧みるべき所であり、其子は如何に母を想ふ事が切であつても餘りに思想がかけはなれてゐるときは、母の温情に對してもうるさく感ずるものであります、又愚痴に思ふのであります、故に

母たるものは時代の變遷に心がけて新しい、生活を旨とすべきであります、さうすれば彼と此とが相携へる事ができ母は子女に教へ又學ぶ事ができるでせう、尙ほ一つ注意すべきは其子女を信任する事です、其子女をして獨立の思想を全うせしめ其意見を尊重する事です、之は晩年になつての母の幸福として必要な條件です、女子は大抵他に嫁すものですが男子は家にあつて妻を娶るのです、こゝが又母の不幸の岐れる所です、一番いゝのは分家することです、新夫婦と舊夫婦の生活を別にする事です、之は兩方のものに幸です、いかに其母が新時代の思想を研究しても少しは舊時代の考が残つて居ります故に其の衝突は子女の結婚後にある事が多い、そは風俗習慣との新分子が入つてくるからです、新らしき教育を受けたいのに我が舊來の家風に悉く従はせるといふことは望むべきことでありません、見識あり獨立の考ある女子は悉く之に従ふものではありません、

例令たとひし従ふしたがとして、もいや／＼に従ふのであつて、決して喜よろこんでする事はありませぬ、さてやがて新夫婦しんゆうふうの間に子こが生れるといふとまたむづかしい事が起おこる、其子そのこは一方いつぱうよりは孫まご又一方またよりは子こでありまして、こゝに新舊しんきゅうの衝突せうつが生おこじます、老人らうじんは不平ふへいをいふか、又子またこの方ほうでは老人らうじんを思おもひ遣やつて其子そのこを全く老人らうじんにくれてしまひます、之は世間せけんまゝあるとであるが尤も厭いとふべきことでありませぬ、祖母ばばに育てられた子は將來すらい其父母そのふぼに氣きに喰くはぬ者ものでありませぬ、舊きゅうの思想しきうの感化かんかが多いからです、そこで又子またこの方ほうでも父母ふぼをいやがり之これを恐おそれ自ら煩悶はんもんして家を苦痛くつうな所として老人らうじんとしても爲ために不幸ふこうを感かんずる事ことになる、だから最もいゝのは分家ぶんけでありますもし分家ぶんけをしないならばそこは老たる老母らうぼの心得こころえとして孫まごの教育けいようは全く新夫婦しんゆうふうに任まかして、手傳てんぱいができればする位くらいにして全く諦あきらめるがよろしい、こうすれば老父母らうふぼの幸福しんぷくは疑うたがはない、要するに女子じよしの幸福しんぷくは三時期さんじきに於つて必ずしも同じ

ではない、如何いかによい父母ふぼの家庭かていに育そだつて幸福しんぷくに愉快ゆきわいに生長せいじやうしても若し結婚けつこんの一條いちじやうを誤あやまつた時は半生はんせいは不幸ふこうに終おはつてしまふ、其結婚そのけつこんに於おいて更に不満足ふまんぞくな點てんがなくつても其子そのこ供どもを育そだてる上に其宜そのよろしきを得えなければ又其獨立またたけりつの時期じきに其處置そのしちちがよくないと老後の不幸らうごのふこうを見るやうになるでせう、女子じよしも男子だんしも同じおなじとであるが幼少えうせうの時から此世このよを去さるまで一つの志こころざしを抱いだいて修養しやうやうし少しでも完全くわんぜんなものになりたいといふ心掛こころがけがなければなりません、さて又事に當り物あたものに應こたじて時ときと場合ばあいとに従したがつて相應さうおうの新し見識けんしきを開ひらいて修養しやうやうをつみ人生じんせいを送おくらうとする心掛こころがけと其行そのおこなひがあつたならば災わざわいを變へんじて幸さいはひとする事こともできるでせう、況いはんんやそれが既に幸福しんぷくの境涯けいげであるならば更に幸福しんぷくの生涯せうがいを送おくる事ができるでせう、



# 理想の母親

中村 五六

人と生れて母親を持たぬものはないし、母親ある以上は之を敬愛せぬものは先づなからうから、現在己が母親に不服を云ふものは世間廣しと雖も稀なことには違ひないが併し理想の家庭と云ふ所から考へると随分文句の並べ様がないとも限るまいと思ふ。然らば汝の所謂理想の母親とは如何なるぞと問はれたら我輩は先づ第一に云はん曰く能く婦人たるの天職を理解し居るの人と、如何に學問に秀ひで實際に長けて居ると云つても母としての資格は未だ充分とは云へぬ。母としての理想は婦人の天職を理解することによりて、始めて成立すべきもので、是を理解せぬと云ふ以上は、逆も小供と云ふものに對する充分な注意は出來まいと思ふ。第二には子供に對する愛情の濃かならんことである。無論誰だつて己れの腹を痛めた子どもに對し

八

て、愛情を注ぐことの出來ないなどと云ふことは無い筈であるが併し随分中には可なり冷淡に過すものもある様である。一体教育なるものは其物が既に愛情の塊なるべき筈のもので教育者が被教育者を可憐と感じ之を愛撫する所に感化誘導の手段を見出し得るものであるから愛情は一般教育者に必要になると同時に母親には最も著しく發顯して居つて欲しいものである。實際娘時代にあれの是れのと只もう流行を逐ふて居たものでも母となつてからは衣服髪飾りも頓と氣が付かず眠むい夜の目も子供の爲めには瞬もしないと云ふ程になるのが母として當然の人情で是程に思ふて呉れる母親がなくなれば可憐な子供は幸福に育ちがたいものである。

第三には母親の身体が健康平靜で且快活ならんこととが願はしい。婦人は一体にか弱いが故か動もすると頭痛、腹痛、眩暈など起して病臥し易いものであるが是が子供には極めて不愉快に感じられるも

のである。夫れが若し長引くか又は屢々であること云ふ日には尙更子供の爲めに不仕合せなことである。尤も母親も冷淡で子供も冷淡であると云ふ場合には大した事でもなからうが母子の關係が理想的に密着して居ると云ふ家庭程母親の病氣が子供の腦を刺戟するものである。假令又病臥する程な重体でなくとも氣分が勝れないで常に鬱して居るか或は所謂氣嫌買で或時は非常に氣嫌よく或は非常に悪いと云ふ様な事があつたりなどするのは幼児教育上最も悪いことである。又それ程の事ではないけれども人に因ると何時も快活の風がないと云ふ様なことがあるが、是も幼児教育には大不都合である。幼児の生活と快活とは切り放すことの出来ぬもので若し幼児の活動から快活なる部分を取つてしまつたら後は全く零となる可き筈のものです。故に之を保護、誘導して行く人は努めても快活しなければならぬものである。況んや母親に於てをやです。

以上は理想の母親が有する資質の一端を述べたので是で盡きて居るではないが此三個の要求は確かに根本的なものであると思ふ。餘は他日書くところ。

●本年教育豫言 谷本博士 明治四十年の教育界には、中學問題が盛んになるでしよう、制度の問題ではなくて内容の研究がです、小學問題は一段落で、盛んに研究の起るは中學でありましよう、中學問題の外には、女子教育と幼稚園であります、女子教育の必要なる事は既に研究が始められて仕舞つて、是から女子教育の施設に就ての研究が始まらうと云ふのです、尙幼稚園の保姆及保育法は、是迄閉却せられてゐたのを、彌よ研究せられる事となるであらうと思はれる、教育界自然の傾向は然らざるを得ませぬ、自分の研究も亦時代に伴つて其歩を進めて居る、既に前年中學問題に就ては、理論的研究を終へまして、或は其内純粹の學理的の部分幾らかを抜にして、其餘を世に公にするかも知れませぬ、又可下現在の全國中學に就て、諸種方面凡十四五種よりの觀察材料を蒐集しました、二三年の内には十分に取纏めて組織的にすべし積ります。

# 家庭に於ける諸儀式(承前)

後閑 菊野

其二 誕生祝

産所諸式

産所で行ふ事柄は臍の緒を截ること。胞衣を藏めること。湯浴みをさせることなどでございます。昔は是等に就いて嚴重な式を行ふことでありました。今といへども忽にすべきことではありませぬ。から参考のためその大様を記して見ませう。山槐記といふ書物に次のことが載せてございます。

治承二年十一月十二日辛未、未二點、皇子安數降

誕中略御臍緒を切り奉る先づ御産成り了る即ち小屬安倍資忠を差はし生氣の方の河竹を切らしむ即ち持參す亮、重衡朝臣之を取りて御前に參り竹刀を作り之を進む洞院局練糸を以て御臍緒を結び奉る内大臣竹刀を取り之を切り奉る

臍緒を切ることを容易の人に任せざりしことは右の例のほか一條天皇の中宮上東門院の御産に外祖藤原道長の妻倫子が御臍緒を切りしこと榮華物語に見え又兼中舊記に御あつとつぎ詞を息みて斯くいへるには御産所へ成り候て公方様御胞衣を御つぎ候とあるなどにて知ることが出来ます

竹刀を用ゐるといふことは風土記に「瓊々杵尊が日向の國に天降りまして土人竹屋守の娘の腹に二人の男子を設け給ひけると其の土地の竹を刀に作りて臍緒を切り給ひける」とある其の蹤を尋ねて今も斯くするなりとのことが書物に記してございます

又胞衣を藏めることに就いては伊勢家秘書誕生の記に

胞衣桶は曲物なり高さ八寸程、口のひろさ七寸ほどに厚く如何にも丈夫に二重のかはにするなり底つよくあるべし、切蓋なり蓋は釘にてしめてよし胡粉にて塗り雲母にて松竹鶴龜を繪にか

とありますのに由つて昔の胞衣桶の作りかたが知られます此の桶を更に杉の木であつく拵へた外箱に入れ然るべき人二人之を携へて吉方に藏めるのでございませすその所には地に穴を掘り四方に石垣を築き其の中に胞衣桶を入れ石の蓋をして置くことのでございませす

臍緒を切ること及び胞衣を藏めることに注意しましたことは右の通りでございませす諸事進歩したる今日に於ては管に其の式を鄭重にするばかりでなく衛生上亦大に注意を要することのでございませす即ち臍緒を切るに用ゐる刀及び其の切口は必ず之を消毒せねばなりません又之を扱ふ人々の身體衣服を清潔にし並に之を結ぶ糸及び繙帯の如きも亦十分消毒を行ふが肝要でございませす若し之を疎略にいたしますと出生の子供が昔所謂臍風即ち嬰兒破傷風といふ恐るべき病にかゝることがあるのでございませす

又胞衣を藏めることにつきまして近い頃まで之を門或は玄關など人の繁く蹈む所を選んで埋めるといふ習ひがありました之は土地及び空気を不潔にする原因となりまして大に清潔法に返ることのでございませす之は成るべく人里離れた所を選んで埋めるか或は焼き棄てるがよいのでございませす但し胞衣會社などの設ある土地に於ては之に托するが最も簡便でそして安全でございませす

次に湯浴みをさせるといふことについて申しませう小兒が生れて始めて湯浴の式を行ふのを湯殿始といひ種々の儀式がありまして昔は朝廷を始め奉り高位の人の家で行はれたものでございませう徳川將軍家などにも昔の作法は幾分か残つて居つたさうでございませす現今普通には用のないことのでございませすけれども古來儀式の一つとして數へて來たことでありますから序に真文雜記にある一節を次にしるしておきませう

若君御誕生ありて御産湯をひかを申すとさきを申



すとは御湯めとら頭のかけを御湯にうつしてひか  
 させ申すなり虎の頭は猛き獸にて諸の獸の恐  
 せ申すことあり虎は猛き獸にて諸の獸の恐  
 る、物にて邪氣を退くる故其の影をうつして御  
 湯をひかせ申すなり又やしをのひしやくを用ふ  
 やしをは唐の菓に椰子といふ木の實あり大さ  
 徑り三寸計ありて圓しそれを二つにわりてひし  
 やくの如く柄をすげて用ふるなり 椰子を併にや  
 しをといふ 椰  
 子は毒を解す物なるゆゑ産湯に用ひて胎毒を解  
 すためなり中略榮華物語に一條院寛弘五年十月  
 十日上東門院の後一條院を生み給ひし條にい  
 く、御湯殿は讃岐の宰相の君、御ひかへ湯は、  
 大納言の君なり、宮は殿いだし奉らせ給ふ、  
 御はかしに宰相の君、虎のかしら宮の内侍取り  
 て、御さきに参る、御つるうち、五位十人六位  
 十人、御文の博士には、藏人の辨、廣業、高欄  
 のもとにたちて史記の第一の巻をぞよむ、云々

此の時のありさまを古き繪に盡きたるに虎の頭を折敷のやうな  
 る物にのせて女房先たち参る體をふがけり貞丈もふに丸はき  
 りて用ふるなるべし

産養

貞丈雜記に小兒誕生の當日を初夜といひ三日目を  
 三夜といひ五日目を五夜といひ七日目を七夜とい  
 ふ此の毎日に祝ふを産養の祝といふ其の當日に  
 わらざれば追て吉日を選びて初夜の祝あり三夜五  
 夜七夜も同じ儀なりと記してございまして昔はか  
 やらに度々祝つたものでございすそのうへ七  
 夜に止まらず九夜をも祝つた例がまゝ古書に見え  
 て居りますこのうち一度は其の家で行ふことで  
 ございすけれども其の餘はみな主なる親戚或は臣  
 下のうちから之を行ふことになつて居りました然  
 し現今では七夜のみを祝ふことゝなつて居ります  
 そして昔の儀式は何れも皆鄭重に行はれたことは  
 勿論でございすけれども今之を略し當時七夜の  
 祝として適當と認められますものを次に記しませ  
 う

祝式 當日は朝先づ神前を清めて神酒、二重餅な  
 どと供う主人自ら拜禮を行ひ豫て定めおいた幼兒

の名を奉書の折紙にした、めて之を供へ次に再び之を祖先の靈前に供へて拜禮をいたします

産敷飾其の他の準備が整ひましたときは當日招待し

しました客を案内して座敷に請じ懇に挨拶を述べ

茶菓を供し客の大かた集つた頃出生の子供に新

調の産衣を着せ傳母或は祖母などが抱いて座敷に

出まして客に對面させるのでございます此の時主人

親ら柵に置いてある名簿即ち生兒の名をした、

めた折紙を取り廣蓋のまゝ客の前に出して披露を

いたします一通りの挨拶が終りましたらば小兒を

退かせ名簿を元の所にかさ然る後豫て整へてかい

た膳部を出して盃を進めます今次に座敷飾の例

一二を擧げて見ませう

座敷飾 其の一例は假に季節を五月と定めをし

て男兒の誕生祝とし其の二は季節を十一月とし女

兒の祝といたしたのでござります

其一

床飾 右床にて廣二間とす

右客位 弓及び籠

正面 鏡

左主従 太刀

柵飾 三重柵とす

上の柵 由緒ある軸物(軸盆に載す)

右の柵 富士形水晶の置物(臺に据う)

左の柵 硯箱 香合

押板 右 熨斗三方

正面 掛物小幅竹に虎

掛物の前に名簿を入れたる廣蓋をおく

左 活花燕子花

其二

床飾 床一間半とす

掛物 陸奥の采女

花 竹に菊

置物 鶴

花と置物との位置は其の形により左右何れ

に定めてもよろしいのでござります

鏡餅

中央掛物の前におく

棚飾

遠廻とす

上の棚

書物歌書

下の棚

香具一式香燭、香合、香匙立等

押板

梨子地文臺硯箱、色紙、短冊を載す

床柱の方に寄せて名簿を廣蓋に載せおく

當日饗應の獻立は其の家の貧富によつて同じからぬは勿論でございますが其の種類や品柄をよく選んで粗末の事のないやうに注意せねばなりません又容を十分樂しませるやうに接待し之を助ける手だてとして或は餘興を設けることもございませう餘興には謠、琴、ピアノ、オルガンなどの音楽がよろしうございませう

宮參

宮參むかしは、うぶすなまゐりと申しました高貴の人の家で昔行はれました法式の大略を申して見ますれば伊勢家秘書誕生の記などには次のとおり記してあります

宮參の法式は參内の如くなり兵具は帯びず守刀乗物の中に入る 中略薙刀二振輿の左右に持つ弓も矢も袋に入れて持つなり神へ進上の物神馬、弓矢、太刀なり 中略神主、幣、神盃を兒に載かせ申すことなり神樂のすむうちは兒、社に居給ふ諸侍 共の所に居る云々

今は時世の變遷にともなひまして弓矢神馬などの奉げものはございませんけれども大體の式に至つてはかはることもございません今次には普通に行はれるものについて申ませう宮參の日限は當今男子が生後三十二日女子が三十三日目と定めて其の土地の産土神に參詣することとございませうが此の日限はいつの頃からかやうに定めたものでございませうか 誕所記といふ書物には「百日のうち白小袖百一日目、色直しとして産婦、兒並に仕子も色小袖を着す色直しの祝あるべし色直しありて三七日の後吉日次第參宮わるべし」と記してございませうし安永將軍の頃の頃も猶生後百二十日以上に

なつて宮參をした例のあるのを見ますれば程遠からぬ時に於ても百日以上を經過して始めて他行させたといふことがわかります。これは衛生上最も然るべきこととございませす。特に今日に於ては乗車をせねばならぬために身体を激動させる恐れがございませす。故に宮參の日限は古例に従つた方がよろしいこと、おもひませす。宮參當日は小兒に豫て新調して置いた産衣を着せ、傳母之を抱き家の長者、或は家族中の然るべき人が之を伴ひ、又家々の模様によつては男女數人の婢僕を召し具してゆくこともございませす。さて神社に到着しましたならば其の旨を神主に報じ姓名、生年月などを告げ幣帛料若干を納めまして儀式は總べて神主の指揮に従ふがよろしうございませす。歸り途には主なる親戚を訪問するが普通でございませす。

此の小兒に着せませす産衣は通例模様物又は無地紋附でございまして之に白無垢或は相當の下着を重ねませす。昔は三夜或は七夜の祝に親戚或は臣下な

どから之を贈りませすこともございませした。が今は大抵生母の里方から贈るが例となつて居りませす。又宮參の歸り途に親戚を訪問するときは千歳飴と稱へまして長い袋に入れた飴を土産として持參する習はしがございませす。但し家風によつて他の土産物を持參するも素より隨意でございませす。又其の親戚の家では犬張子其の他然るべき玩具に麻糸、末廣などを添へて小兒に遣はす。が是れ亦一般の習はしで御座いませす。(誕生祝完)

▲玩具の選ひ方醫學博士加藤照磨氏「小兒の玩具には弾力のある物が最も宜しい。第一は象牙で造つた玩具。其次は護謨で造つた玩具です。齒のはへ懸つた時代には象牙ほど宜い物はない。象牙は齒ぐきを刺撃して齒の發生を早く致します。及護謨は壞れないうで危険がありま、色を着けてあるアニリン色素を使つた玩具や菓子を入れると下痢を起したりなどして有害である。ゴミも下痢を起すから盛へ落した玩具を警めさせないやう、玩具は必ず能く拭いてやることです。『婦人世界』(同題)

# 音楽と家庭

東京音楽学校教授 天谷 秀

近頃音楽が仲々盛になつて來まして、學校にも家庭にも流行して來りました。こうなつて來ると益々音楽を正則に習ふ必要があります。音楽は美的なものでありますから、不規律不正則にやつては少しも美的觀念が起りません。今迄は随分無秩序なやり方をしてゐましたが、これからは正しくないといふ駄目です。さうして音楽は家庭に効のあるものですから、主婦となるには多少心得ておかねばなりません。一家の憂ひでも音楽の爲めに喜びと化し、夫を慰安し、小供を樂しめますなどに音楽の方は大なるものであります。吾輩の考へでは日本音楽は止めて、西洋音楽のみ使用したいと思ひます。學校で西洋音楽を教へても、下等社會には日本音楽の卑しいものを授けますから、學校と家庭とが一致いたしません。これは音楽普及上よく

ないこととあります。又幼稚園の保母は専門的の智識に要せないとしても、相當の思想を有して、唱歌、樂器、遊戯等は研究せねばならぬのは勿論、進行曲位は完全に引くやうにならねばなりません。どうも保母には樂器のよく引ける者が少ないかと思はれます。

音楽は研究するは必要であります、常に音樂會などへ行つて高尚な音樂を聞くのが必要です。音樂會に保母や主婦がドシ〜聞きに行かなくては駄目です。初めは少し位解らんでも、時々耳にする追々解るやうになつて來ます。さうして音樂思想が出來たら、兒童へ教へるのにごく都合がよい。元來兒童は記憶力がよくて感化に富んでゐますから、少し注意すればすぐ覺へます。併し兒童に教へる音樂はその曲を選択せねばなりません。歌詞が平易で曲の面白いものでないと、勞して効果が少ないのですから、注意を重ねなければなりません。

音楽は感情を和はらげると最もよいものでありまして、これが爲め、吾輩の知つてゐる人で、如何に一家の調和を整へたかは、音楽を解せぬ人の想像以外です。音楽の専門家にならなくてもよいですから、これからの婦人には多少教へる必要がありませぬ。氣の荒い婦人でも、音楽を學んだ爲め温順になつた例もありません。君も妻君を向へる時は、音楽をやつた人を選ぶがよいです。ハ、ッではありません。一家經營上に大關係することですよ。この問題は急いでは失敗します、望月代議士のやうにゆつくりと考へねばなりません。(龍東)

▲紐育の摩天閣 紐育市は土地狹隘なるが爲め争つて高層の家屋を建築し居ることは世人の熟知する所なるが目下同地に於て建築中なる高層家屋は十一戸ありて其層數は總て四百一層となり孰れも三十五層以上なりと而して其建築費は六千万圓にしてシムアロン、トンネルの開發費より多き事一倍なりと云ふ

## 入浴上の衛生

新免 義雄

人身の皮膚は呼吸を營みまして、不潔物を排泄致します。そして体温の調節を主とする所でありませぬ。故に此皮膚は衛生即ち清潔法は大に重じなければならぬものであります。否らざれば全身の汗線から出て來る所の分泌液、鹽分、表皮脂酸、塵埃などから成り立つて居る所の汗は空氣中にある細菌の爲め忽ち分解せられて汚臭を放つものでありますから常に注意して之を除き去らねばなりません。之を除き去る方法は即ち御存じの入浴で御座います。尤も入浴には種々ありまして、河水、海水への入浴から始めて冷水浴、温湯浴、蒸氣浴、鍍泉浴などは普通に行はれて居るものであります。同じ温浴にも泳温浴、灌水浴、全身浴などあります。吾々が日々行つて居る所の沐浴は此全身浴の事であります。湯屋即ち公衆浴場は最も簡便な方法な

のであります。全身浴は皮膚の清潔を完全に  
 のみでなく、晝間身体を勞働さした人達には大層な  
 利益で此ために血行を旺盛ならしめ、筋肉中の廢  
 積物を排除し之れを補ふに新鮮なる營養分と酸素  
 とを以て代償しますから晝間の疲勞は忽ち恢復す  
 ることが出来るのであります。此様に全身浴は大  
 なる効果がありますから出来るなら毎日でも入る  
 方が宜しいのであります。殊に旅行遠足などに行つ  
 た時などには是非とも必要の事でありませう。以下  
 尙入浴上注意すべき事どもを記して見ませう。

第一には空腹でも満腹でも其度の強い時は止めな  
 ければなりません。即ち飯の食ひ達や非常に腹の  
 耗つて居る時はよさなければなりません。即ち前  
 者は胃に行く可き血液の妨害となるし後者は眩暈  
 を起す原因となります。次には湯の温度に注意し  
 なければなりません。普通人体の温度より三四度  
 高い所がいゝ加減で四十五度を越ゆると腦充血を  
 起しますから注意しなければならず、去りとして体

温の三十七度より下れば今度は感冒に侵される患  
 があります、それから一度の入浴時間は七八分が  
 適度の所で十分以上も入つて居様ものなら眩暈を  
 起しますから氣を付ねばなりません。そして全体  
 を四十分位で切り上げる様にしなければなりません  
 一時間も一時間半も入浴に時間を費すのは第一不  
 衛生でもあり且又時間の上から云ふても不經濟で  
 あります。次には垢膩の方ですが是は初め石鹼を  
 塗つてそれから手拭で柔らかに摩つて洗ふのが適  
 當です。茲で注意を要するのは石鹼と垢すりです。  
 石鹼の悪いのは皮膚を荒す恐れがありますからア  
 イボレ石鹼の様な純粹なよいもの即ち化學的に良  
 きものを用ゐなければなりません。それから垢す  
 りは先づ用ゐない方が皮膚の爲めです。殊に子供  
 の様な柔かな皮膚は尙更垢すりで無暗に摩つては  
 堪りません、益薄く弱くなりませう。それから洗湯  
 に行く人は妾りに板の間に座らないで必ず其近邊  
 を湯で洗ひ流して座ることです、殊に溝の近邊を

避けて上流に座ることです。是は他人の微菌を避ける爲めです。凡て洗湯の板の間には無数の微菌が居りますから注意して能く洗つて座らなければ危険です。夫れから如何に清潔でも冬などは冷かなる板の間を避けることです、御婦人などには至極危険です。又湯風呂の中で顔を洗ふ人があります。が是れ極めて危険なことです。上る時には能く乾いたもので身体を拭ふのが宜しいが然もなくば能く締つたので拭いて暫くして皮膚の湿りけのなくなつた頃に着物を著なければなりません。以上は普通入浴に就ての注意であります。すが尚温泉浴海水浴については後號に書くことに致しませう。

▲鐵の盡くる時期 英國ツルネホム教授の計算に據れば世界の鐵鑛に現存する鐵を百億噸と假定して現今毎年發掘する鐵の總量一億噸を以て除するときは世界の鐵は百年を出でずして盡くるに至るべく毎年の使用額増加するに於ては或は五十年を出でずして盡くるに至るべしと云ふ

## 子供の早熟

和田 實

かとなしい子供、行義のよい子供、伶俐な子供など云ふ御世辭言葉が世の父兄の頭を刺戟した故でもありますまいが、一般に我國の家庭では子供をあまりに作法詰めにあまりに大人風に躰け様とする傾きがあります。其爲めか幼稚園などに子供を出して居る父兄などの中には今度の先生は手技を教へて呉れないからいけないとか。何うも行義作法の躰けが足りないとか云ふ不平の聲を發するものが往々あるそをです、又如何はしき幼稚園などにては父兄の御機嫌を損じて退校されては大變と一意歡心を得んが爲めに教育上の利害は措いて問はず只管小六ヶ敷しい手技などを課して半ば以上保姆の手傳つたものを御土産として持歸らせて御坊ちゃんやお嬢さんの成績は斯の通りと自家信用の廣告をして居るものもあるそをですが、斯る



人々の目の覺めぬ中は幼兒教育も到底存分に發展をする譯には參りませぬ。従つて今日では年不相當にまけて居る子供即ち幾分か早熟して居る子供と云ふものが身分のよき生活程度の高い家庭に行く程多いと云ふ風であります。是は大いに考へなければならぬ事でありませぬ。勿論、父母の欲目から見ればいやが上にも我子を剛巧にして立派なものに仕上げたいのは誰しも同じ事ではありませぬが、併し子供を年不相當にませさせると云ふのは決して將來に幸福を持ち來たすものではありませぬ。否寧ろ將來には必ず不幸な絶望を持ち來すことになるのですから大に恐なければならぬものであります。早い話が室咲の梅には香がなく其上少し寒い風に當れば忽ちしぼむと云ふのと同じことで身體の方にそれ丈の力のない中に早や既に精神の方面に異狀の發達が來るのですから何處かに不調和な處があり、無理な處があるに違ひないので、是が先に行つて必ず報ひて來て存外な不足な

ものとなるに極つて居るのであります。諺に十で神童十五で才子廿才過ぎては並の人などゝあるのは至極穿つて居ることだと思ひます。尤も此早熟には二種類あつて一つは子供の生來の遺傳から來るものと、一つは、子供の生ひ育つ家庭の境遇及其教育の方法如何によるものとあります。前者は多くは救ふことの出來ないもので後來或は一種の偏人となつたり、或は輕るき精神病者となつたり、甚だしいのになると全く發狂してしまふものなどもあるををです。斯る子どもを持つた時は成る可くは子供を田舎の様な所に移して務めて子供を刺戟しない様にしなければなりません。が、後者は子供には少しも缺點がないのに父兄其他のものが殊更に之を刺戟して早熟させるのですから其罪全く父兄にあるので、我輩が敢えて茲に喋々して大に此弊を矯めたいと思ふ次第であります。そこで尙進んで今少し具体的に子供の早熟な點などを指摘して見ますと第一には言葉遣

ひです、是が一般に羨のよい家庭と云はれる家程、子供の言葉が大人びて居て、恰も老人の集まりかと思ふ程に見えるのが頗る多い。そして話の間に挿む所の感嘆詞などもアキラと行く可き處がオヤマアなどゝなり、ハ、アと笑ふ可き處もホ、と笑ふ様になるので何となく天真の爛熳を缺て殊更に容姿を繕ふと云ふ様に見えるものです。一体幼児には幼児特別の表情が必要なので言葉なども特別の幼児語があるものですから。是等は或程度迄は許して遣らなければなりません。尤も片言と訛りとは此限りに非ずです。が併し是も極幼稚なものには矢張或程度迄は止むを得ず許さなければなりません。是を全く止め様とするには舌と唇の使用が充分に發達するのを俟つより外はないのであります。即ち漸次に矯正し行くより外はないのです。唯ぞんざいな下等な言葉は成る可く最初から知らしめない方が得策です。一体下等な言葉遣ひと云ふものは舌や唇の用ひ方が極簡單で力

強いものですから幼児には容易に覺えられ従つて一度之を覺えると今度は容易に他の優雅な舌回はりの六敷しい言葉には移り難いことになるものであります。故に幼児には最初から丁寧な言葉遣いを覺えさせる必要はありますが、去りとして一概に大人同様な言葉遣ひをさせるのは其思想を早熟させることになるので注意しなければならぬことであります。次には遊戯です。遊戯は子供の生命で之が爲めに子供は發達して行くのでありますから、子供の子供らしい處は悉く遊戯中に表はれなければなりません。然るに動もすると子供の自由な遊戯を殊更に制限して外見を立派に、上品に、そして然も考あるもの、様にし様として或はそんなをしてみつともないとか、そんな真似をするものではないとか、斯うするものです、あゝするものですと云ふ様な命令禁止を二六時中絶えず流出させるものがあります。是は詰らぬ話です。命令や禁止で子供を能

くし様とするのは餘程、大きな子供のことで幼児には逆も出来ることではありません。若し幼児が其通りになつて来るとすれば其子供は必ず早熟な子供でませた「こまらやくれになるに」極つて居ます。是等の早熟した子供が遊戯して居る所を見ると或は他の子供に餘計な世話を焼いたり或は兄さん氣取りや姉さん氣取りで「そんなこと云ふものぢやないのよ」など、いやに他の行動を批評したりするものです。此様に氣が方々に廻はり過ぎて来ると彼方、此方に氣を配るために益々能く氣の着く子供になり益々才子とはなりません、其代り彼方此方を氣兼ねるため充分な自己の發展を遂げることが六敷しくなつて遂には録名者にもならずにしまうことゝなるものであります。

故に遊戯中に現はる幼児の活動は出来る丈口舌で以て左右しないで、止むを得ずして、禁止や命令を用ゆる時の外は、成る可く模範に因つて導き模倣力を利用して誘ふと云ふことにしなければなりません。

せん。即ち感化誘導の中に極めて自由に極めて快活に幼児を引き込み不知不識の間に啓發して行くと言ふことにならねばなりません。殊に幼児を極めて鷹揚に上品に育て上げたいと云ふ時には尙更子供を口舌で引き廻はして發達させ様としてはだめです。反省力も發達せず、自覺も充分でない幼児には逆も思考に因つて己れの行動を左右し様など、云ふ考へは無理にも起させられぬものです。故に幼児教育は徹頭徹尾模倣的誘導、無意識的感化と云ふことで進まなければならぬものです。然るに世の幼児教育者には往々にして「斯う云ふ譯だから何々角々の事をしてはいけません」「あなたはなぜそー云ふことをしましたか」と長々と訓戒などして居るものがあります。誠に考のない仕方です。其暇にお伽話しても聞かせた方が餘程利益であります。



# 笑顔の力

孤蓬生

ウイリアム、ハットンといふ有名な数學家の許へ  
 或る上品な田舎の婦人が、切に話したい事がある  
 といふので尋ねて来た、婦人は内々で、其夫とい  
 ふ人が、婦人に無情く當つて、毎晩外へ出て行つ  
 て、自分は其が實につらい、で貴方に伺つたら、  
 何うかよい方法はあるまいかと、それで来たのだ  
 といふ事を告げた、斯ういふ事はよくある事だ。  
 忠告者としての評判を落さぬ様に考へられぬ事は  
 ないと考へて「それは譯はない、斯うすれば間違  
 いことはない、いつでも笑顔で御主人をとよりもちな  
 さい」と答へた、婦人は大に感謝して行つた、二  
 三ヶ月も立つた頃に此婦人、雞、一番を贈物に持  
 つ来て、ハットンに向ひ「貴方の仰に従ひました  
 所が夫も元の通りになりまして、外へ遊に出る事  
 もなく、いつも優しく親切にしてくれます」と嬉

し涙で話した、といふ話がある  
 善い事にも悪い事にも婦人の笑顔の力といふもの  
 は非常なものである、此人を喜ばす能力の外に表  
 はれた笑顔といふものは婦人が世の良い秩序制配  
 の爲に影響を與へ得る様に天より受けたものであ  
 る、男といふものは女に造られる所の多いもので  
 あるから、女が己の才能を正しく用うれば、男を  
 して正しからしめる事が出来る、一家の主である  
 男は其快樂をそぐ事はあるが之を作る事は出来な  
 い、これは婦人の職分であるに婦人の特權である、  
 婦人に「愉快な」といふ所がなかつたら婦人の天職  
 は盡せない、それなら如何して婦人は愉快である  
 事が出来るやうか、身体、精神、行爲（座作進退、  
 氣質も含めて）の美なる事によつて出来るのであ  
 る、道學先生が「容貌美しき事」をけなすのは氣が  
 知れない、ヘバルト、スペンサーが「美貌何者ぞ  
 只一皮膚の事のみ」と言つたが、氏の言こそ實に  
 一皮膚の淺臺な言草だ、美貌が心を惹きつける力

を有するの「自然」の思召である、

道德上の欠點ある、才能の至らぬ人は、肉体の美

を上等の部には入れ難い、悪氣のない人の顔とい

ふものは愛らしいものである、愉快な笑顔は醜い

顔をもよくする、才智ある事善き性質を備へると

いふ事は理想的美貌には必要な條件である、完

全に愛らしい顔といふのは、幸福な且つ有益な年

を送つたといふ思召の爲に得られる、心の平和、

及未來の嬉しい希望より成立すべきものである、

痘痕は犯した罪ほどに美貌にとりては敵ではな

い、誰しも一點の難ないといふまでに揃つた顔立

は持つてゐない、が次に掲ぐる規則を、場合に應

じ手加減をして遵奉したら、恐くは愉快な心であ

るであらう、

一、自ら制して柔和忍堪なれ

二、機嫌を變へぬ様にせよ、特に健康に異状ある時、腹立ちし時、心亂れし時に注意し、禱により又己の足らざる事及過を思ひて心を柔けよ

三、怒りて物言ひ又は振舞ふ勿れ己の言行に付て

祈りクリストならば此場合に如何に處すならん

かと考へ見よ

四、物言ふ事の價値ある如く沈黙も亦屢々貴むべき事を忘るな

五、他人に多きを望む勿れ、己がしかざるゝを欲

する如くに堪へ且つ許せ

六、答ふ時に鋭き言葉怒れる言葉を以てする勿

れ、つぐものは喧嘩ならん

七、最初の不和を用心せよ

八、優しき調子にて物言ふべし

九、機會ある毎に情ある、喜ばしげなる事を言ひ

ならへ

十、人々の氣質を呑み込み、少事なりとも凡ての人に同情せよ

十一、例令些細の事と雖も多少他人を慰むるを得

ばそを忽にすべからず

十二、むつとし、疳癢を起し、又は急に不機嫌の

顔をかほする等とうの事ことを避まけよ

十三、己おのれを捨すて他たに従したがふべし

十四、干渉かんせう、讒言ざんげんをする勿なれ

十五、善意ぜんいなりと思おもひ得えべき時ときには惡意あくいなりと誣しうる勿なれ

うる勿なれ

十六、子供こどもには優やさしく而しかも斷乎だんこたれ

此最後このさいごの規則きそくは子供こどもに對たいするものなるが、夫おつとに仕わふるは又また甚はなだ六ヶむつしい所ところがある、が併しかし常つねに己おのれの機嫌きげんをよくし、常つねに愉快ゆきわいげならん事ことを努つとめたなら

ば、其親切そのしんせつと優やさしい事ことで以もつて夫おつとを制せい服ふくする事ことが出来るできるであらう、男おとこは威いを以もつて勝かち女をんなは柔なやを以もつて勝か

つべきである、ゼカリア、ホツヅンといふ人は

性せい來らい人の良よい柄がらではなかつた、で自分じぶんの歪ひがんが心こころ

から己おのれの妻つまを誠まことにつまらぬの様に思おもつて、寧むづ

ろ奴隸どれいの様に取扱とりあつかつて居ゐつた、妻つまの料理りょうりする食物じよく

は何時いつでも氣きに入いらず、妻つまが骨折ほねをつて夫おつとを喜よろこばさ

うとする事ことは會々たゞ夫おつとの怒いらを買かふに過すぎなかつた、

かくして長ながい間夫あいだをの不機嫌ふきげんを我慢がまんして忍しのんで居ゐつ

たが、或時あるとき妻つまの柔和じやうわが遂ついに勝利しょうりを占しめた、或日あるひゼカリアは朝餉あさげを濟すませて用もちを帯おびて外出ぐわいしつした

たが、或時あるとき妻つまの柔和じやうわが遂ついに勝利しょうりを占しめた、或日あるひゼカリアは朝餉あさげを濟すませて用もちを帯おびて外出ぐわいしつした

たが、途中ちゆうちゆうで大おほきな魚いさなを買かつて妻つまに宛あて、家いへに送おく

り、夕餉ゆふげの膳ぜんにしつらへよと言いつてやつた、が何ど

う料理りやうりせよともいつてないので妻つまは其魚そのいさをを煮ゆてい

ゝか天麩羅てんぷらにしていゝか乃至ないしはシチュウにしていゝ

のか分わからない、忠實ちゅうじつやかな此このの妻つまは尙なほ夫おつとを喜よろこば

さうと色々いろくな心こころを碎くだき、遂ついに色々いろくに料理りやうりして置おか

うと決心けつしんした、心盡こころをしの料理りやうりはやがて出来でき上がる、

すると彼女かのじよは裏うらの小川のかわへ行いつて蛙かえるを一匹ひきつが捕とへて來き

て之これを針はりの中なかへ仕舞しまつて置おいた、その中なかに夫おつとは歸かへ

つて來きた、お皿さらは卓子テブツの上に並ならべられた、夫おつとは例れい

によつて澁面じちめん作りりつて不興ふきようげな顔かほつき「おい、己おれの

買かつた魚いさをを受け取とつたかい「ハイ」料理りやうりをして置おいたるゝな、屹度きつとまた己おれの口くちに合あはない様ようにしてしまつたらう、(覆おほを取り乍なら)大抵たいてい斯ごとうだらうと思おもつたんだ、何なんと想おもつてお前はマゝ天麩羅てんぷらになんぞしたんだい」マゝ貴郎あな、私は之これは貴郎あながお好すだ

と思つて「そんな事があるもんか、己はこんな物は嫌だ、何故又お前は煮魚にしなかつたんだ。」  
 「オホ、貴郎や、此前煮魚をこしらいたら貴郎は天麩羅の方が良いと仰つてでしたから、私は只ね、貴郎のお氣に召す様にと思つて揚げたんです、ですが煮たのもこしらへて置きましたわ、」斯う言つてもう一つの覆をとると、見事美味さうに煮た魚が皿に盛つてある、此の見ても美味さうな様を見て、意地わるい夫は却つてむつつりし、  
 「何だ此んな料理！ 羨着なんか何んだい、之をシチュにしないうつて言ふのは何んといふ性の悪い女だい」妻は笑顔に愛嬌溢れて、すぐに立つてシチュを夫の前に供した「私ね、貴郎、お氣に召す様にと思つて、お好きな之をこしらへて置きませしたの、」何に！ 好きな料理？ こんな不味い物何んだい、こんなけちな物を並べ立てるより蛙でも煮ろさ、」  
 ゼカリアは何時もちういふ悪口をつくのが癖なの

で、今日も亦此手を喰はされるだらうと用意をして居た妻は例の鉢を持つて來て夫の前に明けた、大きな墓はニョツキリと横はつて居る、ゼカリアは流石に吃驚して飛び上つた、妻は例の笑顔で優しげに「もうこれ御飯を召し上つてもいい、でせう、ゼカリアも是に至りつ愉快げに呵々と笑つて、今までは自分が悪かつたと妻に謝びて、其以來遂に愉快な家庭となつたといふ話である。  
 愉快な婦人といふ事は世に尤も必要な事でやる、愉快ならんが爲には常に我を捨て、素直に、親切で、常に真心から人をいたはらねばならぬ。  
 或者學者が自分の妻の事を和白砂糖の様だと言つた、色は白くないが甘いといふ意味であらう、美貌といふ事が全く不必要ではないが、其性質のスキートであるといふ事が最も肝要である。



# 婦人と親族法

太田 英 隆

## 第三節 親權の喪失

此前には親權の效力に付いてお話し致しておきました。是れから其親權の喪失と云ふことに付いて少し述べ様と思ひます。

元來吾邦の習慣と致しまして、親か子に對して親權を行ひ、子の一身上のことに付いては凡て世話を見て居るのでありますから。外から何彼れとそれに干渉するのは如何にも不都合の様に考へられます。併し乍ら法律が親權を規定して父又は母に此權利を與へてありますから。父又は母たる人が餘り感服の出來ぬ人でありまして、親權を濫用したり又は甚だしい不行跡なにかある場合におさましても、尙ほ親權は行なはしむると致しませうが。子の爲めに不利益なことか多く、法律が親權を設けて子を保護しようとする精神と反對

になつて來ります。それ故に此様な場合にかきましては裁判所は、其子の親族又は檢事の申立てに因りまして。親から此權利を取り上げてしまふのであります。是れを親權の喪失と申します。之れは常に子を保護するばかりでなく、公益上亦此様にする必要があるからであります。

右に述べました通り裁判所が親權の喪失と言ひ渡すのは。親權者が親權を濫用したり又は甚だしい不行跡なことがある場合に限りです。そして親權の濫用又は不行跡と云ふことは、頗る漠然とした事でありまして、如何なるものか其標準となるかと云ふことに付いては、法律におさましても別段に之を定めてはありませんか。兎に角親權の濫用と云ふことは、親權者が法律の認めて居る範圍を超へて其權利を行なつたり、又は法律が認めて居る範圍でありまして、其親權を行なふ方法が宜しくないのを云ふのであります。例へて申しますれば、子か悪い事をした時に之れを懲戒する場



合に當つて打ち毆いて傷を負はせたり。或は監護教育等の方法が宜くないとか又は財産の管理が其當を得て居らぬと云ふ様な場合であります。又甚だしい不行跡と申しまするのは、例へば飲酒などに耽つて家事を顧みないと云ふ様なのを申すのでありまして此等は事實に付いては總て裁判所の判断に依つて定まるのであります。そして親權の喪失を裁判所に向つて請求することの出来るものは其子の親族又は檢事に限られてあるのであります。子は自分からは如何なる場合であつても此請求を致すことは出来ないものでありまして、法律分りに此請求をすることの權利を與へない譯は子として親を訴へると云ふ事は、道徳名分の上等に於ても決して許すことが出来ぬからであります。又親權の濫用と云ふ事が其全部に亘らないで、單に財産に關係して親權を行ふ方法が宜しくないと云ふ場合例へば、子の教育や監護などに關しては其方法が宜しいけれども、親權者か子の財産を消

費したり、又は子の財産を以て危険の商業を營むと云ふ如き場合に於ては如何かと申しまするに。此場合にかきましては、必ずしも親權の全体を取り上げてしまふ迄の必要はありませぬから、唯財産の管理權だけを喪失せしめて此弊害を妨ぐ事に致して居ります。そして親權を行ふ父が此權利を喪失する裁判所に言ひ渡しを受けた時は、此權利は家にある母に移り、若し母のない時又は母か之を辭した時、或は之を行ふ事が出来ない時は後見人が子の財産を管理するものであります。親權を有する父又は母が親權を濫用し、又は著しい不行跡のある時、又は財産管理の失當に依つて、全部又は一部の權利の喪失を宣告するのは、己むを得ざる場合から出たのでありまして、此等の原因が止んだ後も仍ほ此權利を回復させないと云ふの道理はありませぬから、此場合にかきましては裁判所は本人又は其親族の申し立てに困りまして、親權の回復を言ひ渡します、之を失權宣告

の取消しと申します。  
 親権は先に述べました如く、權利であると同時に義務でありますから。之を辭退することの出來ぬのか原則であります。併し乍ら女子は其自然の性質と、吾邦實際の有様とに依つて、婦人には往々財産の管理に不當なものがありますから、母に恨つて財産の管理を辭退する事を許すことに致して居ります。其故は若し之を許さないで強いて母をして子の財産を管理させ様とする時は之が爲め却て不利益と爲るような事があるからであります。併し乍ら母も財産に關係のない子の身上に係る事に付きましては、父と同じく其親権を行ふ義務があるのであります。法律か母に財産の管理以外の親権を抛棄する事を許さないのは。子を保護するものは親に優つたものではなく、之を他人に委ねて親が顧みないと云ふ事は道義にも逆り子の利益にも反することか大いばかりでなく、母を以て子の身上の保護を爲すに最も適當と

認められたからであります。それ故に母か子の財産の管理を辭した時は後見人を置くものでありまして母は子の身上の保護を爲し後見人は其財産を管理致します。是で親権のお話しは全体か終わりましたから。次には後見に付いてお話し致します。

### 臺所の改良 道 子

私は常々、そを思つて居るので御座いますが、凡そ日本の臺所程非文明なものはないからと存じますので、憶面もなく茲に改良す可き節々を申し上げます。第一には例の竈ですが是は是非とも思ひ切つて改良竈にしなければ臺所を清潔にすることが出来ません。煤は文明的臺所は大禁物です。そして竈の下には薪を（炭でも）入れる箱（薪は其引き出しに入れる様に造る）が必要で、斯うすると竈が高くなつて中腰にならずに立つて居て仕事が出来ます。次には水流しを高くすることです。是は通常の臺付の流しの様に構しらへて流しにはトタンを張るのです。流しの下は野菜物を置く戸棚に作ると便利で御座います。それから、いろ／＼料理したものを板の間に置かないで必ず棚の上か卓子の上に置く様にすることです。それには卓子よりは棚を工夫して要らぬ時は外づして置ける様に構へると頗る重寶で且清潔であります。

## 在米日本婦人

在米國 西山 愷治

日本婦人にして米國に來るもの年と共に加はる然れども其の最も多きは加州殊に桑港附近を第一とし次はシヤトル附近とす、彼等は其の職業によりて凡三種に區別せらる。

- 一、主婦として來れる者、
- 二、學問を目的とする者、
- 三、勞働を目的とする者、

一、米國にある日本婦人中主婦と名けらるゝものに三種あるを知る、即ち一は日本内地にあると、きより已に結婚の式を擧げて此地に來れるもの、其二は此地に於て結婚せるもの、第三は結婚すべく來れる者なり。日本内地より已に結婚して來るものは稀に見る所にして又往々米國に於て結婚の式を擧げしものなしとせず、第三の結婚すべく來る者は近年の一流行にして所謂寫眞結婚最も多

三十

し、吾人が在米日本婦人に望むところあらんとするは實に此の三種の在米主婦なる人にあり、彼等は良夫を有し或は最愛の子を有す米國憲法は日本人の歸化を許さず、然れども米國生兒 (Natural Born) に對して此れを拒み得ざるなり、吾人は我が歸化權が對等國際交渉によりて得られずとすれば或は此の方面より獲得するの止むを得ざるを知ればなり、其の日本人排斥の聲の如き若し日本人が撰擧權だに有せば恐らくは聞かざる所なるべし然れども惜むべし我に歸化の權利なく又撰擧に預る資格なし、吾人は善良なる在米日本人の主婦によりて米國の土地に擧げられし其の健兒をして生育せし撰擧權を取得するの益々多からんことを望んで止まず、此の重且大なる責任を有する日本婦人が第三に擧げし寫眞結婚に依るの甚だ危険なるを叫ばざるべからず、所謂寫眞結婚なるもの、甚だ大膽にして而も之れに危険の伴ふものあるを思はざるべからず、吾人が渡航の船中見聞せし某

々女の如きは單に一片の知人の紹介と一葉の寫眞とを以て萬里の波濤を越えて此地に相會せんとす其の意氣や熾にして強し、然れども思へ結婚は人生の一大事にして容易に事を決して一幕の痴事を演ずべき者ならざるのみならず、如上の大責任を有する主婦にして此の輕舉あるは寔に惜むべきことなりとす、在米邦人の多くは働さに疲れ主婦の慰藉を乞ふもの西に東に充ち満てり、主婦が彼等を輔けて共に米國の天地に大に爲す所あらしめ、我國家に貢獻するの雄々しき大精神を有し給ふ余が尊敬せる日本婦人は今少しく自重せられんことを希ふて止まず。

吾人は所謂寫眞結婚せんとてシャトルに着き所謂花笈の來らずして船に待つこと旬日上陸さへ許されず、遂に手を空うして送還せられしものあるを見、又吾人は所謂寫眞結婚を實行して良夫を高買ひせし爲め失望の日を暮すうちに良夫には見捨てられ汚はしき社會の底にまで押落されし可憐

なる日本の女子ありしを耳にせり、此に於てか吾人は我が尊敬せる日本婦人の爲めに結婚の甚だ壯嚴なるを要し、毫も輕躁早斷の擧なきを希ふ爲め幾萬言を弄すとも此れを繰返さで惜からざるなり、教育あり、自重あり、意志強き健全なる日本婦人の來つて在米日本男子をして輔け婦人自身も此地に修養して女子の地位を高められんことを祈る。

二、學問を目的とする者、夫れ米國は自由の國にして女子を尊ぶこと厚く切なるが故に女子教育の道亦夙に開け幾千の女學校も爲めに狹隘を告げ男子の大擧へまで押掛くる傾向あるは熾なりといふべし。女子にして政治學を修め國際法を論じ撰擧問題を口にして政治上の意見を路傍に演説するが如きは敢て日本に見る能はざる現象なりとす、日本婦人にして米國大學に學ぶもの數多しと雖も多くは自活勉學せるものにして東京にある女學生とは聊趣を異にせり、而して米國の地や日本の女

學生を遇するに親切倒らざるなく夏季四ヶ月の家庭勞働に於て優に一學年を支ふる學資を得せしむること容易なり、然れども日本婦人にして未だ此地に學ぶもの甚だ稀なり。

三 勞働を目的とする者 米國に止まる三年初めは早うの挨拶も出来兼ねて眼に笑みの身振位にて意志を表示するに過ぎざりし程にして早くも千弗(我二千圓)を貯へたるものあるを聞く彼等は骨身惜まず働くが故に主人に愛せられ、心身は強健に、主人より英語の教授を受け、時に主人と共に教會に入つて技師の講話に宗教道德問題を聴く、意志強き女子は勞働して成功せざるもの殆どなかるべきを信ず、然れども金の得易き丈けに其れ丈け金錢を浪費し、精神の修養足らざる人の常として精神的快樂を求むるを知らずして肉体的快樂に耽らんとす、惜むべし時に貯蓄空うして正業にあるを肩とせず、心身怠慢爲めに醜界に流れて再故山を見るの顔なきに到るもの皆然りとす豈惜

まざるを得んや。

要するに在米日本婦人が自己の天職の何れにあり乎、重大なる責任を帯び、大なる理想を抱きて此にありし其昔を偲び、渡航の船中意氣太平洋を呑むの概ありし其の雄々しき大精神をして枯死せしめず、益々吾人大和民族をして此地に發展せしめんことを希ふて止まず。

われ問ひけらく

「人皆の其足もとに寄り行く程も其をみなうし

わるや

たぐい稀れに情も深く且つ

輝きてかくるところなき心か」と

「否とよ百千の人にまざる程

うるはしともなくかしくくもなし、

否れとたゞ彼の女の笑は

短歌

天 菅原喜代藏

薪負ひて都にいそぐ賤の女の

けづらぬ髪にみぞれ降るなり

地、閑居 や ま 子

わけくれの友とさくこそうれしけれ

峰の松風谷の水おと

人 鹽野政子

大島の瀬戸の高波治まりて

霞に沈む松風の音

◎ 大空に木枯高くさゆる夜は物すこやかな星の林も

◎ 定めなき雲間にすみて人の世をのぞくと見ゆるさやらへ男の子

◎ 大空にひたばしる雲大鯨の洋に浪ける様にも似たり

◎ 吹雪する冬の寒き日幼子に手踊させつ旅する身哉

◎

◎

◎

馬しきて大根を市にひさぐ女の息氣もこぼりて木枯の吹く

◎ 鹽野奇零

迷ひ入りし森の細道さすらひてふと得し詩には、えむ我や

◎ 春の日は草家の軒に糸車めぐれる音もものどかなりけり

◎ 菅原喜代藏

◎ 萬代と深え行く可き姿かな年立つ今朝の松島の松

◎ 旭子の光りをそへて老松に初聲あけし千代のひな籠

◎ には年の幸ある門に乙女子の羽子つきあそぶ袖美しき

◎ や ま

◎ 嬉しさを胸に秘めつゝ右左別れてかへる朧夜の道

◎ 鹽野政子

◎ 春がすみ沖の小島に柵引きて魚とる舟の見えかくれる

◎ たちならぶ岸の姫松かすむなり沖の白帆もかげ見えぬまゝ

◎ 菅原喜代藏

◎ 天宮に秘めし白衣を召しませる姫に、似たり雪の富士かぬ

◎ なき君の涙に似たる露おきぬともに愛でもし庭の白萩

◎ 常闇の胸のうつろに住め甍をばらひて清き朝心地かな

◎

此頃の料理

石井泰次郎

鰯のかびたん漬

いわしの頭を取り、腸を去り、其まゝ申にさして程よく焼き、次に申をぬき、こまの油の煮立ちたる中に入れて、手早く揚げ、西洋紙の上に取りて油を切り置き、木耳を火に浸し置き湯煮して、固き所を去り幾枚も重ねて、小口より切り、ねぎを、一寸位づつに切り、それをたてにして、細く切りざつと、湯煮し湯を切り置く、右の品に出来上りしならば、みりん酒を鍋に入れ、煮ざり醬油、酢を合せて煮返し、鉢に入れ、糖がらしのきざみたるを入れ、其中へ、いわし、木耳、葱等を入れ、一日位浸けて食するなり、

小皿

よめなけしあへ  
うちいか雲丹焼

三十四

鳥賊は、足の方と頭の方と別々になし、甲を取り去り、甲の付きたる方を、庖丁刀にて、二つに割り、開きてよく洗ひ、指にて皮を剥き去る、足の方は、元の方につきてある、すみ、腸、かたき所目だま、など取り、洗つて置き、他の料理に用ふべし、うに焼には、足は用いず、甲の方を、二寸に二寸五分位の角に切り、樫木にて、よくうちたゝき、金串にさして焼く、大いに焼けし時、雲丹をぬり、再び火にかざしてあぶり、暖さうちに申をぬき置く、雲丹は越前うにの上品なるを、雞卵のきみにて容き、刷毛にてぬるなり、よめ菜のけし合、よめ菜は、塵を去りて湯煮し、水に取り置、けし五勺を炒り、摺盆に入れてよくすり、鍋に、鯉煎

汁三勺、醬油二勺、みりん一勺を入れ火にかけ、煮立ちたるを、おろして、摺盆に入れ、けしとすりませ、

前のよめなを、しほりて、水氣を切り、摺盆へ入れてあへるなり、  
小皿に、いかと共に盛り合するなり

### 眞似方料理

と も 子

#### 親子どんぶり (四人前)

かしはの肉三十錢ばかり求めたるを味噌と砂糖と醬油とにてよき程に味つけて煮る。此時煮汁を可なり餘分ある様分量すること肝要なり。煮終りたらは半分餘の煮汁と肉とを取り除けて残りの汁にてよき程に切りたる葱と椎茸とを煮付け更に先の肉を入れて之に玉子四つばかりくづしてかけ玉子とちを造る。扱て別にどんぶりに暖飯を盛り取り除け置きたる煮汁を充分にかけ次に先の玉子

とちを適宜に上に載せ漸く蓋して蒸らしたる後膳に上ぼす。却々においしくて商賈人はだしなり。試めして見らる可し。

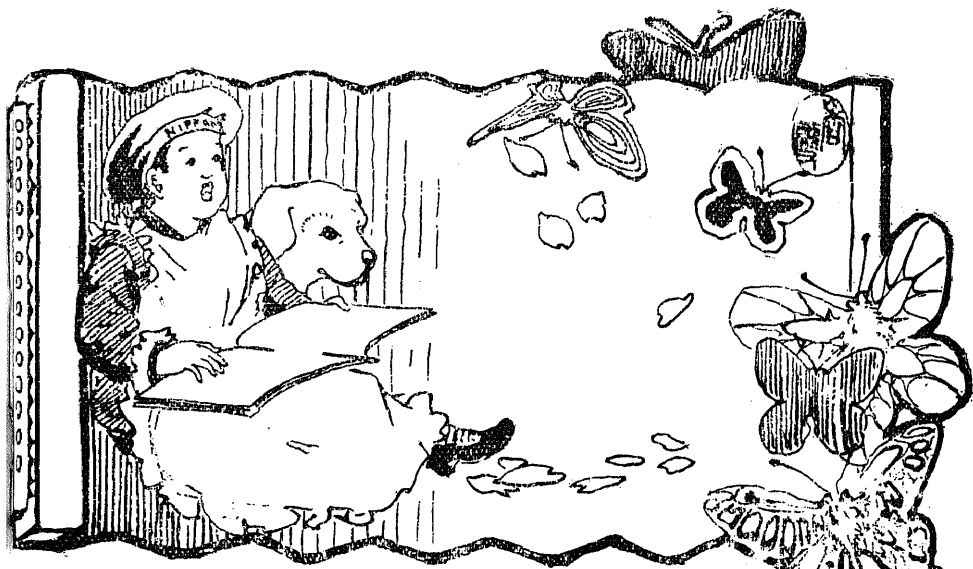
#### おむれつ (老人と子供)

挽きたる牛肉二十錢(五人前か六人)に葱細かに刻みたて、砂糖と醬油とにて味つけて下ろし之に玉子一人前二個の割にてわり込み、よく攪き回したる後、焼き鍋(牛鍋にて可)にて一人前づ、焼きながら庖丁にて一方を起して包む可し、立派な、オムレツ殊に老人や子供に歡迎さるゝか料理出来るなり。

但し肉少なければ一個半位にても可なれど餘り少なきときは包み悪し。食する時に醬油又はソースを少しかけて用ゆ可し。







お伽なこ  
笑話 猫なし村

硯山人

シルダと云ふ村では、むかしから猫と云ふ獣が一匹もゐませんでした。で、シルダ村には鼠の多い事それはくたいした物でして、うつかりしていようものなら何でもかでも皆噛られてしまいます。村人は大層閉口致しまして、どうかして鼠を退治したいものだ、兼々思つていました。或る夕方、の事でした一人の旅人か手の上に小さな猫を抱てこの村のとある小さな旅籠屋にとまりました。その晩のことでしたが、旅籠屋の主人は旅人の室にやつて余りまして、いろく世間話の末

どうもこの村には鼠がたくさんゐて困ると話しました。それをききました旅人はこれはべたと思いましたがさあらぬ顔付で。

旅人「それは定めし御困難なことでしよう、幸私は茲に「猫」と云ふ獸を持っています。これはそれは上手に鼠をとります」と云ひながら、手に抱いた猫を放してやりますと、何しろ今迄餓っていた小猫ですから、見る間に、天井裏や戸棚の隅などかけまはり、大きな鼠を二三匹生捕して、旅籠屋の主人の目の前で、ムシヤ〜と食べてしまいました。

これを見た旅籠屋の亭主は大層びっくり致しました。

「之は御珍しい物で御座いますね。どうか之れを私に賣て下さいませんか」とたのみましたので遂々賣ることになりました。

さて翌朝旅人は急ぎの用事があるので朝御飯もそこ〜にして出立致しましたので宿屋の主人は猫

の飼方を聞いて置くことをすつかり忘れてしまいました。さあ大變折角猫を貰つても飼ひ方がわからなくては仕方がありませんから大急ぎで下男に云ひ付けて旅人の跡を追ひ掛けさせて何を食べきせるのか聞かせました。そこで下男は偉駄天の如く走けて行つて旅人を追ひかけて。停車場へ行つて見ると丁度今流車が動き出した處で旅人は向ふの窓から首を出して見て居ました。下男は大きな聲で

「猫は何が一番好きですか」と聞きますと、旅人は

「そーさね、小供よりは老人が好きだよ」と、云ふ間に流車は見えなくなつてしまひました。下男はびっくりしたのしないのつて「是は大變だ、あの猫は人が大好きで殊に老人が好きだと云ふからには是からは毎日村のおぢいさんやおばあさんを殺して食べさせなければならぬ。あゝとんでもないものを貰つたものだ」と思ひながら歸つて來て

早速主人に話すと是も亦大變な驚きで、  
 「それはいけない人を食べる様な獸を飼てをくよ  
 り鼠の方が餘程い」と云つて早速「猫」を殺せと  
 村人に下知しました、

その時丁度猫は大きな粗食でしきりと鼠狩をやつ  
 ていましたので村の若者は急いで粗倉に四方から  
 火を放ちました。折から風かヒュー〜と吹いて  
 ましたので見な〜火の手が盛んになり今度は猫  
 を殺すどころのさはずでなく一生懸命に消防に  
 盡力致しましたがとう〜その甲斐もなくシルダ  
 村は皆灰になつてしまいましたとさ。  
 (なはり)

## 愛らしのカール

### つる子

昔々獨乙の片田舎にカールといふ子が居りました。  
 た。年は九ツ薔薇色の兩の頬、ぱつちりして、愛  
 嬌ある其目、額に波うつ金色の髪など、げに、愛  
 らしい一少年で御座いました。年とりたるヒルダ

といふ姉様の外兄弟皆で五人、御母様は幼き昔な  
 くなつて、御父様の手一つで育ちました。家が  
 大層貧しいので寒さと飢とはよく此兄等の知つ  
 て居つたを御座いました。而し有福の家の子  
 よりも猶幸福で、あつたのは五人とも大層仲よ  
 して粗末な食物に満足しつゝ、誠に楽しく暮した  
 そうで御座います。中にもカールは幼いながら  
 も中々親切な強い子で、何時も顔よく買物かひに  
 參りました。或る夕方カールは隣村まで買物  
 に參りましたが、丁度冬の最中として、白雲にとざさ  
 れたる廣い廣い野原を横ぎり、寒さにまけず、風  
 に怖ぢず、凍える手に、大きな牛乳の瓶をさげて  
 我家をさして急ぎました。山は冷めたき月の夜に  
 静かに白く、星は輝く、唇に「急げカール子供  
 達が待つて居ます」と云つてるやうに見えて居ま  
 す。急ぎ急いで、カールは終に、重苦しげに雲  
 を靄へる我家の窓に、樂しげに輝きかどれる燈火  
 を見たときには、寒さを忘れ、飢を忘れ、思はず

全速力で走り出しました。入口の戸を押しわけ、  
「今歸りました」と云ふや否やせいたる息のうちに

ヒルシユフオーゲル！ ヒルシユフオーゲル！

嬉しい不僕はまたお前の傍に歸つて來た、何時もく夏の様でいな。

となつかしさに申しました。扱ヒルシユフオーゲル！とは何のそで御座いませう。兄弟？ イ、エ、可愛い小馬？ イ、エ、おもしろいちんころ？ イ、エ 奇麗な奇麗な陶器のストープで御座いました。室の片隅に据ゑられて殆ど天井迄も届きさうな高さ、花鳥人物の繪をもて麗はしく色どられ、頂には金の冠の様な飾、黄金の四ツの足は丁度獅子の爪の様、金色燦爛、美しいと云はうか立派と言はふか見ぬ人には想像のつかぬ程貴いもので御座います、何故ヒルシユフオーゲルといふでせう何故こんな立派なストープが貧しいカアールの家にあるでせう？、げに此ストープは非常な古物で六十年前カアールの親父様が或る崩れた家

の下から少しも損せず掘り出したので、後で聞く  
と、ヒルシユフオーゲルといふ有名な陶工が拵へた貴重品だと云ふとが解りました。其れから、此五人の子供達はヒルシユフオーゲル、ヒルシユフオーゲルといつて、丁度生きている者を可愛がる様に此ストープを愛しました。夏の日には緑の苔を持つて來て其の周圍に着せかけ赤い夏草を以て飾をそへて喜び、冬の日には其まはりに 躡つて栗を焼たり、胡瓜をくべたりするのが、何よりの楽しみで、冷い氷雪の上をも厭はず、楽しく學校から歸つて來る程で御座いました。中にもカアールは一番の仲よしで何時も何時も  
僕が 大くなつたら陶器つくる人になつてお前と同じ物を拵へませう。そして、お前は僕が新しく建てた立派なお室へ拵つてやらう。  
とヒルシユフオーゲルの肩をなでつゝ、申して居りました。  
買つて來た牛乳で、夕飯を濟した後は、例によつ

て、子供等は皆ストーブの周圍に集つて樂しげに遊んで居りました。お父様は朝出たきり歸つて来られませんが、寢よといふても今暫しと願ふ兒等の請を許して、姉も共々笑ひ興する聲のうちに、入口の戸が開き、吹雪ふき込むと思ふと、お父様は歸られました。非常に疲れた御様子で、靜かに椅子につかれ、力なき聲で「皆んなおやすみ」といわれますと、大人しい子供達は皆次間に行つてしまひました。カアールは仲よしのストーブの傍に踞つて、是も温しくやすみました。姉のヒルダが子供をねかして、出で来ますと、父様はいかにもがつかりしたやうに溜息をつかれ。

ヒルダ！私はモーヒルシュフオーゲルを賣つてしまつた寒さは強し、食物は無し、どうも金が要用だから、今夜半金受取つたから残りの半金は明日行商がストーブをとりに來る時、受取れる筈だ。

マアお父様！此寒いのに！子供が寒さで！

とヒルダは驚きと悲みとに顔色を失ひました。眠たさに半眼を閉ぢかけたカアール、是を聞いてやをら立ち上り、

エ？、ほんとう？、お父様！、うそ言ちやいやそんな事ありません！

と、ヒルシュフオーゲルが賣られるならば、天も落つるとカアールには思はれたので、御座いませう而し父は其の眞實なのを申します。明日商人が取りに來るをも聞かされました。

お父様！ お父様！ ヨーお父様！ 私、わたし

た町に行つて、雪掃きでも、道掃除でも、何んでも、致します。出來る丈、働きます！そして御金を儲けます、さつと、皆が助けて呉れます。

だからネ、ヒルシュフオーゲルを賣ら無といつて下さいな、ネお父様！ ネ……………ネどうぞ御金を

を商人に返してやつて下さいな

父は一言も云ひ出でず、唯悲しげにカアールの顔をジーツと見つめ、愛はしげに立ち上り、ランバ

を持って、次の室へ行つてしまはれました。お姉様  
 のヒルダは泣き伏すカールを、兎や角と慰めま  
 したが、悲しさに心亂れてか、カールは姉の言  
 葉は耳にも入れず、洋燈はなし、姉は已むなく行  
 つてしまいました。鼠が出て来て床の上を駆けま  
 はります、室はだん／＼寒くなつて参ります、カ  
 アールは身動きもせず、虹色に彩られたるスト  
 ーブの側にうづくまり、顔をびつたり床につけて夜  
 一夜泣きあかしました。

夜は漸々、わけかけて來ます、お姉様は朝餉の用  
 意にランプを持って出て來ました。カールの傍に  
 座り自分の頬をカールののにつけて、

「カールヤ、カールヤ、ドウしました？ こ  
 ちらお向き、お姉様ですよ、話してーサア」  
 やがて戸を叩く音かして、聞き慣れぬ聲が聞えま  
 した。

御免なさい商人で御座います。ストーブを戴さ  
 に参りました。

ヒルダが戸を開けますと、澤山の人達が手に幾本  
 もの繩を以て入つて來ました。グル／＼／＼／  
 ヒルシーフェルを縛つて、手車の處へ持ち出  
 しました。カールは唯黙つて壁に向つたまゝ、  
 切に涙が何時になく青ざめた兩の頬を傳つて！  
 通りかゝつた知り合ひの一老人が入つて來て、  
 カールさん！あの立派なストーブをお父様が  
 御賣りなすつたつて？、而しさう泣かなくつて  
 もいゝぢやありませんか。若し私がカールさ  
 んだつたら大きくなたらどんな遠い處までも  
 ヒルシーフェルを探しに行きます。あとにつ  
 いて行きます。泣くのおよし、何時かきつとあ  
 れに遇へますよ、カールさん

と新しい一つの望をカールの惱裡に残し置いて  
 老人は行つてしまいました。

探しに行く！ わつついて行く！ アーンウだ  
 とカールは遽に立ち上りヒルシーフェルを乗

せて行く車のわとを一目散に追かけました、其行當どんなにしたかカアール自身も覺えぬ程であります、ヒルシーフーゲルが、或るステーションから瀛車に乗せられて、運び出さるゝ迄に、カアールは何時かストーブの中に入つにしましましたどうして入つたので御座いませう。ストーブには黃も着せてあります繩もかけてあります。多分あの鼠が穴をわけるやうに噛んだり、かぢつたり、押したり、ひつぽつたり、夢中になつて人足の休んでる間に、ストーブの口から入り込んだので御座いませう、而し誰一人之を知りつけた者はありませんでしたから、カアールは安らかに其中に入り、昨夜來の疲れで、何時か夢に入つてしましました。瀛車は段々進んで行きます、眼を覺しては暗さに驚き、夢に入つては姉を思ひ父を考へ、扱てはまた瀛車が止つてカアールが見つけられて、殺され相になつたをなど、現のやうに思はれて、安き心地もなく長い時間を過しますと、愈々瀛車

は止りストーブは下され、再び運ばれて、或る家に着いたやうです。なんか二階へでも登せらるゝ様です、扱暫く、人足の達が休んだ後厚い敷物の上を運ぶやうに、みんなの足音が静かにしつとりと聞えまして、ヒルシーフーゲルは立派な室に据ゑられた様です。「オ、立派なストーブぢや」などいふ聲が聞えます。カチャツと音がして眞鍮の戸を誰か開けますと、

オヤマア、何でせう、着物が！、アラマア子供！ はんとの子供！

周囲の人の驚は一通りぢやありません。カアールはストーブの中から飛び出して誰かしらん、其前に立つて居らるゝ方の足下にひれ伏し、

どうぞ私をこゝにおいて下さいませ。私は此ヒルシーフーゲル！私の一番の仲よしのヒルシーフーゲルと別れるのが辛くつて一緒に参つたので御座います。どうぞ一緒に暮さして下さいませ。どうぞぞ、

と両手を合せて御願ひいたしますと其御方はにこ  
御笑ひになり、

可愛い子ぢや、なぜストーブに入つて来たか話  
すがいい、驚くとはない朕は此國の王様ぢや  
と豊かな御聲でいはれました。カアールは驚く處  
ではありませぬ。王様は大層親切な方だと聞いて  
居りましたから大層喜び、

ア、王様！此ストーブは私共が何より大事に可  
愛がつて居りましたのですが、家が貧乏で御座  
いますので、お父様が賣つてしまはれましたの  
です。私ストーブを持つて行かれては明日から  
淋しくてたまりませぬ。夢中になつて追かけて  
参りました。私明日からヒルシーフェルと其  
他のあなたのストーブに、焚く木を伐りに出か  
けて、毎日よく働きますから、どうぞ此處にお  
いて下さい。ヒルシーフェルト一緒に暮さし  
て下さい。私が居りませぬとストーブがどんな  
に淋しがるか知れませぬ。毎日私が養つて居  
つたので御座いますから。  
と涙ながらに願ひ上げます。カアールの顔を王様

はつくぐぐと御覧になり、

マテお前は大きくなつたら何にならうと思ふか  
樵夫に？

イ、エ私は陶工になりたいので御座います。ヒ  
ルシーフェルの様に、そして立派なストーブ  
を拵へたいので御座います。

そうかよく解つたモー泣かずに、起て！可愛い  
兒ぢや朕が引き受けて立派な陶工に育て、や  
らう、若しお前が甘一才になる迄に、此ストー  
ブと同じ物を拵へるやうになつたらヒルシーフ  
ーゲルは屹度お前に返してやる。

と是れから王様はカアールをば、一方ならず御寵  
愛になり田舎に居る其父にも詳しく手紙を下さい  
まして、いろぐと御親切に御育て下さいました  
ので、カアールは日夜専心勉強をして、とうとう  
立派な陶工になり、甘一になつた時、ヒルシーフ  
ーゲルを頂戴して再び親兄弟を善ばせることが出  
來ました。ヒルシーフェルもどんなに嬉しかつ  
たので御座います。



亞米利加よりの私信

在米 幻

本月は在米朝露生よりの原稿は来らず、今年の正月に着く積に、昨年暮家族との寫眞を送りたるに對して、左の私信あり、面白き節もあれば、其儘載することゝしつ。(東生)

これは御捕でようこそ御出下されましたマア貞一さんの大きくおなりなさいましたこと、貞二さんにはお初に御目にかゝります余念のなほお顔まことに可愛らしきこと、サアどうぞおかけなして……と申したところがせまるしひルーム、椅子は唯一つ……そこがエマツ子・シヨンの不思議サにてこの机の上に、約束の珍客様がたを御招待できるのですまことにとりちらしてゐますがマア御ゆつくりと御話下さいませ

この頃は朝の六時から夕べの五時まで十一時間のはたらき、それから例のパター嬢の貸家の方に廻りて用をすまし梟や蝙蝠のやうに日暮れてからこつちの天地、こんなせまひところにて解文字を書きちらしてゐるわけ、イヤハヤ殺風景至極、無趣味千萬、オマタニこの頃は龜甲形の文字までも讀み試みてゐるので、原稿もロクに書かれず大すきな子ども手紙はこんなに拮くなつてゐるのに、新年來返信も書かずに居るので新年と云へばとくに私としたことが御目出たうを云ふのを忘れてゐたそれこそアンマリ御目出度わけ、御ゆるし下さひ

鹿瓜らしく賀狀書いたところで下手に遅れると二月になつてから横濱につくなんぞあんまり滑稽だからことしはどへも年賀狀は書かぬことゝきめたのですなどと云ふて追々ブルくなまけてくるのでアメリカ風に吹かれた効能などゝ冷がしてはチト酷ですがどうもやむを得ぬのでサンデアと云ふものゝなき動口ですから……そのことにつひては何れ誌上に申上ませううつかかり天機をもらしては面白くありませんからなあ

奥様に御目にかゝるのはまことに久しぶりでござひますね鎌倉山の土穴からでゝきたキタナイ坊主をよくマア教へて下されましたこと、どんなに御イヤであつたでせうとあの時のこと思ひいだしては冷汗がでるので野猪的の傳道熱にかられてレデイに對する遠慮も禮儀も知らずせて技術ばかりも進歩のあとあればともかくもその後すて、願みすと云ふありさま、御日にかゝると何だか御小言でもいたゞくやうでカーテンをわたるアメリカの風いと寒く身に汐むやうですしかしピアノの音色きくことにゆるがせなりぬ師恩はわすれずせめては耳ばかりもこの道をきゝわくるまでにあたりたやと心がけてゐますどうか御叱りなさらんで下さひ

コ、アカチヨコレトでもこしらへませうかこの頃はカリホルニア名産のチープルオレンサがでゝゐますアツプルはととも料理のやうに甘いしくはありませぬ何れ歸朝の折は是非御捕で料理へ御出を願ひたいのです本當です田園の女子はどんなに喜ぶか想像がつかんほどです漁村の子守だちも歓迎するのでせう磯邊の御案内もいたませう舟にのりて島の貝拾ひもできるでせうどうか是非本當に一度は料理に御出下さるやうに御約束していたゞきたい

のです

どうですこの机の上は？鏡に香水に刷毛の各種に剃刀にシヤホンにまるで日の本の蝦茶様の机のほとりのやうな、イヤハヤ俗臭いとい堪へがたくて御話にならんです前借俗氣の相加はるは賀すべしと云ふやうな旦那様御手紙まで心の底に林香のくさみぬげぬ身には吊してくれぬは恨めしやとつぶやいたのですなるほど宗教の向上から云へば聖凡不二の境涯でなくてはならぬ筈ですしかしながら戒徳もなく禪機も未熟なる私にはやゝともすれば俗氣は心の底までも透りはせずやと寒心することが多いのです寒夜に祖塔を揮して青苔に堅し星光花の如きとき、献身の誓を立て、など、ふるき戀の胸に畫かれて消えぬが如く、人にまげたくない、金ほしい、衣食住のたのしみにいそしみたいと云ふ今の心術にくらべてはいかに多幸にしていかにいかにうるはしかりしかとしみじみの思ふこともござひます

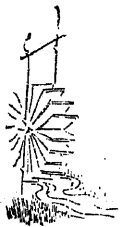
孤獨の生活の非をささる時來るべしとは中村先生まで冷かし半分は仰せられたことであります法燈を僱持して群生を照らさんとのしるしや不自然なり病的なりと人に笑はるゝとも席にあらず捲くべからず石にあらず轉すべからずすしかし所謂俗的生活にも、一歩ずつんで美的生活にも熱烈ある同情をもつてゐるものです唯その渦浪中に身を投ずるほどの元氣はなひため前途は黒暗々どうなるかしられど唯今のところにては昔の戀の忘れがたくて、山居禪定を學びし時の閑寂の境幕はしくてたまりませぬまた修行の足らぬのでせういたしかたありません

企てゝゐたことにつひてはどうかこうか見込がつくらしく、病氣だに起らずば二三年にして歸ること出来るかと思ふてゐますしか

し學びたい慾は中々深くなりゆくやうですから教へ子たちにはすまぬが四五年は放浪させてもらはねばならぬやうです  
真一さん御ねむいでせうサアこの詩集の上に御やすみ、真二さんはモーれんぬしてゐらつしやるやうです、まだ時雨で知りましたこの月と來月とは毎日の雨です御寒いでせう私はかつて教へ子の病を見舞ひたる手紙に

やむときく幼き友のうつしえに心してふけアメリカの風とよんだことがござひます今宵の風の心なや身にしむ寒さ、ことは七年ぶりにて遠近の山に淡く白ひもの裝はしてゐることしかしこれは御恙もなく御年を迎へさせ玉はんとの御厚真、さすらひ人のもとまで三千里も遠しとせずして御出くだされし温情には、うれしからぬ人の子やある、排斥の聲いかに起るとも生存競争のしもといかに身にふりかゝるとも吾には師あり友あり教へ子あり吹面ふ寒揚抑風、

原稿は二月分の間に合はぬやうです勉強して三月分にはキツトさしあげませう學校井に園の皆様へ宜しく申あげて下さい  
一々手紙書きたいがくたびれてモーれむくなりました、グードナイトー？



旅の道草 なにがし

首途

この春以來住みなれし越路なる新發田をあとに、筑紫なる豊前の國に出で立つ。多くの人々町はづれまで送りす。まだ瀧車の便になき所とて送る者送らるゝ者互に思ひ切りのわるき事限りなし。されどやむべきにあらねばやがて人力車を走らす。數丁も行くほどに後よりあへぎく馳せ來る人のけわひす。かへり見ればなごりなして逐ひ來し一人なりけり。互に言葉はなくて只目禮せしのみなるに、車は忽ち前に人は後に相遠かる。やがて又もや驅け來るものあり。かたみに目禮して忽ち別るゝ前の如し。おひすかかり相別るゝ一殺那に千萬無量の情あり。人の心は只時此こそ清らかなりけれ。

萬代橋

万代橋の長しといふ事はかねてより聞きしかど今渡りていよく其長きに驚きぬ。名所といふ名所來て見れば噂ほどのものならぬは世の常なれど、此橋のみは聞きしにも思ひしにもまさりて長きものかな。車をはしらせて行けどもくたつ橋の上なるには呆るゝばかりなり。かゝる橋の下を流るゝ信濃川の水の海の如くなるも理なるべきに、さて其川口なる新瀧の海いと淺くして港の用をなさぬとは何事ぞや、實に新瀧は只万代橋のみぞ見るべかりける。

善光寺

兩を冒して善光寺に詣づ。山門の前通り一面に石を敷きつめ其兩側に商人の軒をつらねたる、淺草にも似たりけり。山門の右手に塔の様したるホルマリヤン石礎の廣告の仰々しき、世の中の無風流

といへるものを一つに集めたらん心地せらる。本堂其他の堂塔のいたるところ種々なる名の下に善男善女より財物を淨捨せしめんとするは、例の古刹保存の上には必要なるべけれどとまりとは又うるさきものなるかな。

碓氷の紅葉

ふりはへて訪ふ人あるを、道すから見んとする此旅、いとうれしとたのしみけるに、何事ぞ霧いと深くして碓氷の山は紅葉の影だに見えず。わづかにわが乗れる瀧車の左右數尺の處を辨するのみなるぞうらめしき。あの霧のあなたにこそと思はるゝも甲斐なし。

霧を深みうすひの山はもみちはの  
にしきのあやも見られさりけり

幼稚園

年久しく住みたりし都の、來て見れば一しほなつかしきに。わきて年頃日毎に通ひし幼稚園の有様や如何ならんと第一にたづね行きてけるに、多くの幼兒は皆われを忘れもせて親しげに寄り添ふさまこよなく愛らし。あはれ今急ぎの旅路ならすばなど思はるゝもせんなし。されど時の間に又相別るる身とも知らぬ無心の兒等はかつて每朝袴の褌にまつはりし時と變る事なく威勢よく、『先生おはやう』『先生おはやう』と時は已に正午を過ぎたるにも拘らず口々にかく呼はりつゝ集り來るに、われは只胸塞りて何となく涙さへ催しぬ。心とりなほして『さようなら先生は又來ますよ』と別れを告ぐれば、いづれも呆れたらんおも、ちして見送る兒等の様、けに無心とはこれなりけり

雪の富士山

見れどあかぬふじのみやまよ。いざ其清き姿をとほかり都を出て立ちし甲斐もなく、雲深くとさして麓だに見えず。年頃喫りおきし友をたづねたるに其人の不在なりしにも似て口をさし

### 掛川の里

越の國にて朝な〜愛てにし朝顔のはやく枯れはてければぬきすて、立ち去りしを信濃路を經都をよぎりて今遠州掛川の里に來て見れば、所々の垣根にまだ咲きのこれも面白し。夏はまだ此あたりにさまよへるにや。はた此あたりの夏は今や行かんとするにやとをかし。

行く夏をまたも見よとや朝顔の

かけても咲くか掛川のこと

### 沿道の秋色

遠近の山々は已に雪をいたゞき、早稲田は早く蒨り乾され、人は多く綿入を着たる越路を立を出でて信濃路に入るほどに、谿間の紅葉今ぞもなかと染めなされいと面白く眺められしを。碓氷を越えて都に近づくに従ひて野山の色まだ緑深く稲はなほ田にありこのあたりには、佐保姫のいまだ影だに見せぬるやといふかりつゝ都に入れば、げにや人は皆裕を着たりけり。重着したる身の何となくららばづかしきこゝちせらるゝもをかし。更に都を立ちいで、東海道を過ぐるほどに氣候はます〜暖かく、野山はいまだ錦を着けず、木々の色更に夏に異ならず、掛川にやどりけるに宿の女はいまだフラネルの單衣を着たり。あはれ北の國より南の里、山のあなたよりこなたとつき〜に染めもて行けばこそ佐保姫も心しづかにうつくしく秋の錦を織り出さるゝなれと、遠近の景色を

見るに付けても思ひ出さるゝは旅路の一興なるべし。

### 浪華の一夜

わが故郷なる和歌山に近き浪華の都は、嘗てしばしばよぎりしは〜とままりて親しき地なるを、まして此旅にはおのれらに對面せんとて丹後より、紀州より母と兄とふりはへて出で來ませるが在れば、心をどるばかりにて梅田の停車場に着きぬ。車を走らせ町を過ぎ行くに、車のあまたたび橋の上なとゝろかし行くはけに或人の言ひげんやうに大坂は水の都なればなりけり。行きかふ人の心せはしげなる實に大坂はいつ見てもいそがしき都なりけり。されど燈の下に親はらからうちつどひて四方山の物語に夜の更くるをも忘れたるは、水の都といへど冷やかならず、秋とはいへど春の風吹く心地して、いそがしき土地もこゝのみはのどかにぞ覺えし。こゝと選曆の祝したまへる我母の各地に住める子等をつむしろに集めたるうれしさ。満足とは此事とも言ふべきおもうちしたまへると嬉しく。碓氷の紅葉富士の白雪ばものかは、此母のこのえがほ見しこそ此旅行中の最も大なる喜なりしか。

年をへて母と語れば秋の夜も

### 月の須磨

あかぬわかれを人々に告げて浪華の都をあとにしつる夕、須磨舞子明石のあたり月清く浪白く松只黒く其けしき得も言はれぬさまなり、晝ならば幼き頃讀本にて地理書にて誦じげんやうに白沙青松相映すべけれど、月の光には物皆只白く黒く風のやうなる色の際だゝぬところに一しほのおもむきあり。今は瀛車といふ文明の利器のおそろしき早さもて驅けぬくる此あたり、そのかみ歌仙人

磨もだすまれしなり行平朝臣もさすらひしなり、などひとりかにかくと古を忍びてあかす見まもるほどに、瀛車は容赦なく進みて早くも身は播磨路深く運ばれぬ

わくらははにおりてとはまし須磨の浦や

もしほたれけん人のなこりを

月姫の立ち舞ふ袖にかよふらん

まひ子の涼の松風のおと

明石潟歌のにじりのおもかけを

うつすこよひの月のさやけを

### 嚴 島

名にしあふ安藝の宮島、我國三景の一と何才の頃よりかきなりしけん。物の本に繪に寫眞に人々の話に見聞してはやくより我心の中にえが、れつる宮島はいと小さきものなりき、そは神社の宏壯なるをのみ主として想像したればなり。書物の繪解なども多くは宮居と島居とのみなればなり。即ち殿島といふ島は神社のあるが上に只幾許かの人家あるのみにて、かの江の島と大差なかるべしと思へりしなりき。今このあたりを初めて通る我身の瀛車の中より眺むれば、こはいかに島は我頭の中にえがきたるそれに増して更に其幾倍なるを知らず。其思の外なるに呆れて同行の人に笑はれしぞはづかしき。げに百聞は一見に如かずりけり。足かの島の地を踏み親しく宮を拜したらんには、宮のかうくしさも島の大きなる事もさらに明らかなるべけれど、急ぎの旅にはこれもせんなし。只島の大ききの我あやまりをとき得たるをうれしと思ふ間もなく大鳥居の影は見えずなりぬ。あはれ人に語らんもはづかしきは我あやまりなりけり。

### 關門海峡

地圖にえが、れたる此海峡のへだ、りを見て、およそこれほどなるべしと例の我頭にえがき居りしを、一とせ都にありける時ある夜人と忍ばずのあたりをそつるありきして、池のあなたの家の燈火のつらなれるを見て其人の、馬關より門司を見るは此景色に似たりと語るに足まだそこに至らぬおのれは、さばかり近きにや我想はか、りきなど語りし事のありけるが、今親しく其地を踏み門司の燈火を此方より望みていかにも忍ばずに似たかなとたしかめぬ。あくる朝船にて馬關より門司に渡るに、水深けれども狭き此海峡かの巨船ミネソタの通り得ぬもことわりなり。さてはかゝる狭きところの水いと深きもあやしく、太古の歴史にも早鞆の瀬戸の名の見ゆるを見ればそのかみのこゝも今に變らざりけんなどとりまぜて考ふるほどに山陽鐵道の連絡汽船は早くも門司の棧橋に着きぬ。雁と共に越路を立ちて碓氷に霧をうらみ、掛川に残れる夏をしたひ、須磨明石の月をめで、殿島の宮をはるかになろがみたるわれは、かくしてつひに筑紫の人となり了りぬ。

### 編輯記事

本號には宮川壽美子女史の家庭に関する記事と近藤耕造氏の火なしかまと實驗談とを載する筈でありましたが、兩氏とも非常の多忙にて原稿不切迄に間に合ひませんでしたから次號に譲ること、致しました。

短歌三光には御約束の通り賞品として本誌を月々差上ますから御希望次第至急受取人を御指定下さいまし

會費領收報告(自明治卅九年十二月二十六日)

至明治卅九年十二月二十六日

金額 拂込月日

三、五〇(自一月至三月)	奈良あ
七〇(自四月至十月)	中川よ
三〇(自一月至三月)	小野英
一、〇〇(自十月至四十年七月)	原傲信
六〇(自六月至十一月)	樋口まつ
一、二〇(自三月至四十年三月)	太田太
一、二〇(自十二月至四十年十一月)	堀井琴子
一、〇〇(自四月至四十年一月)	關口たけ
一、〇〇(自五月至四十年二月)	窪田八重
一、〇〇(自四月至四十年一月)	中村しん
五〇(自十一月至四十年三月)	立石せみ
一、〇〇(自十二月至四十年九月)	増澤なみ
三〇(自十月至十二月)	宮澤たま
一、〇〇(自七月至四十年四月)	村田きぬ
二、〇〇(自四十年二月至四十一年九月)	今井千代子
一、〇〇(自卅九年十二月至四十一年九月)	伊藤たか
五〇(自七月至十一月)	太田なめ
五〇(自十月至四十年二月)	磯畑せい
六〇(自七月至十二月)	海室ちじ
五〇(自十二月至四十年四月)	太田捨
一、二〇(自十二月至四十年十一月)	山村助太郎
一、〇〇(自五月至四十年二月)	岩佐大道

金額 拂込月日

四〇(自九月至十二月)	山口と
一〇(十二月分)	中嶋雪
五〇(自八月至十二月)	永井満
二、〇〇(自卅九年四月至四十年十二月)	岡本よ
三〇(自十月至十二月)	大西益子
一、〇〇(自六月至四十年三月)	小原みよ
一、〇〇(自四月至四十年一月)	村越し
四〇(自九月至十二月)	高山ふ
二〇(自十二月至四十年二月)	長尾瀧野
五〇(自九月至四十年一月)	小林美知
九〇(自四月至十二月)	伊藤音鳴
一、〇〇(自七月至四十年四月)	小峯く
六〇(自十月至四十年三月)	司馬のぶ
一、〇〇(自十一月至四十年八月)	村田未子
一、二〇(自四十年一月至四十年十二月)	小泉數子
二〇(自十一月至十二月)	井上香意
六〇(自七月至十二月)	吉野ふ
八〇(自十一月至四十年六月)	吉田た
一、〇〇(自七月至四十年四月)	松岡くす
九〇(自四月至十二月)	佐藤扇
一、五〇(自四月至四十年六月)	長岡エ
一、二〇(自十二月至四十年十一月)	中嶋哲子
一、〇〇(自十月至四十年七月)	猪狩え
一、〇〇(自四十年三月至四十年十二月)	吉川あい

一、〇〇(自六月至四十年三月)

五〇(自十二月至四十年四月)

五〇(自十月至四十年二月)

五〇(自十月至十月)

六〇(自五月至十月)

三〇(自十月至十二月)

九〇(自四月至十二月)

一、二〇(自四月至四十年三月)

九〇(自四月至十二月)

(以上十二月二十六日拂込迄以下改號)

正誤前領收報告中眞鍋稻子十錢は三十錢の誤なり

○市内會員領收報告は集金人より受領證交付わ

は掲載を略す

以上弘道館受取

會費領収

(自四十年一月廿八日 至全 年二月廿八日)

金額	年	月	日	姓	名
一、二〇	四〇	一	四〇、一三	村山	モト
六〇	四〇	一	四〇、六	奈良	あ
六〇	三八、一〇	一	三九、三	清原	與八郎
一、二〇	四〇	一	四〇、一	橋本	常
一、〇〇	四〇	一	四〇、一〇	眞鍋	イネ
五〇	四〇	一	四〇、五	鹽見	イケ
三〇	四〇	一	四〇、三	小松	ちか
一〇	四〇	一	四〇、一	山崎	芳代

三〇	四〇、一	四〇、三	小野	英
二〇	四〇、二	四〇、二	中松	秀
一、一六	四〇、三	四〇、二	坂田	代
六〇	四〇、一	四〇、六	守永	たつ
五〇	四〇、一	四〇、五	伴茂	樹
一、二〇	四〇、四	四一、三	拔山	計
九〇	四〇、一	四〇、九	壹岐	志
一〇〇	四〇、一	四〇、一〇	酒井	嶋
七〇	四〇、一	四〇、七	坂井	ひ
五〇	四〇、二	四〇、六	吉田	は
六〇	四〇、一	四〇、六	千葉	松
一〇	四〇、二	四〇、二	松村	き
一、二〇	四〇、一	四〇、二	藤澤	二
六〇	四〇、一	四〇、六	山川	と
六〇	四〇、一	四〇、六	濱川	と
三〇	四〇、一	四〇、三	南枝	の
五〇	四〇、一	四〇、五	阿部	長
一、〇〇	四〇、一	四〇、一〇	秋山	性
一、〇〇	四〇、一	四〇、一〇	吉田	さ
一、二	四〇、一	四〇、一	小幡	さ
一、〇〇	四〇、一	四〇、一〇	中嶋	ま
一、二〇	四〇、一	四〇、二	小倉	き
四〇	四〇、一	四〇、四	平塚	ほ
六〇	四〇、一	四〇、六	小川	み
六〇	四〇、一	四〇、六	澤川	く





フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會  
編  
纂

# 談話材料

全 壹 冊  
定 價 金 參 拾 錢  
郵 稅 貳 錢  
近 刊

右は専ら女子高等師範學校附屬幼稚園で使用して居る童話を纂輯し之に斬新な新作

童話を追加したものです。幼兒教育に熱心な母親方や幼稚園の先生方は此書に因りて幼兒に話す可き談話は何

んな種類のものをも何んな風に話すのかと云ふことが判りませう。

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會  
編  
纂

# 幼稚園遊戯

全 壹 冊  
定 價 參 拾 錢  
郵 稅 貳 錢  
近 刊

右は専ら女子高等師範學校附屬幼稚園で現在實行して居る所の遊戯を纂輯したものであります。世に遊戯書は澤山ありますが幼稚園特別のものはありません。本書は實に此類の書物の魁です。地方の幼稚園の方々には是非御研究を願ひます。前兩書共本會々員には特に一割引の實費を以て差上ります。

發 行 所

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會

# 投稿懸賞募集

## 種類

◎ 加話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分

◎ 短歌 本誌四ヶ月分以上一ヶ年分

◎ 一般記事 本誌の上本誌に載録せるものは内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取らずして其指定する人に本會より直接送ることを得

## 一注意

短歌は随意の用紙にて可なれどお伽話及一般記事は一行廿二字詰にて半紙又は野紙に書かれたし原稿は凡て返戻致しません。

此募集は期限を定めません毎月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。

開き封で應募原稿と標記すれば三十匁迄は

郵税二錢で參ります

## 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

## 入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一冊郵税共金拾一錢
- 六冊前金郵税共六拾錢
- 拾二冊同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

明治四十年三月一日印刷  
同 年三月五日發行

## 禁轉載

發行兼編輯者 辻本卯藏  
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
 發行所 女子高等師範學校内  
 フレール會

## 大賣捌所

東京市神田

東京堂

同

弘道館

## 廣告取次

東京市京橋區新着町

弘業社

育成研究會主筆 太田龍東 共著  
教育實驗界記者 中田春峯

各校  
批評

# 女子東京入學案内

附 入學試驗問題集

正價 四十錢 郵稅 六錢

萬朝報曰(前略)各校の特長と俱に亦其缺點をも指摘し殊に其教育法と現在生徒の風俗とに忌憚なく批判を加へたる所尤も異色を放てり紛々たる入學案内の仲人口に乗せられ東都の學校は總て完全無缺なりと信じて上京する者多き現時なれば此書は確かに忠實なる報告たるべし」と其他の各新聞雜誌等皆異口同音にこの書の眞價を揚言せり以て其内容を知るべきなり

## 發兌元

神田區表神保町

淺草區下平右衛門町

福岡書店  
岡村書店

(再版)